

No. 100

2021.1

農工通信

The Graduates' Association of Tokyo University of Agriculture and Technology



女織蚕手業草 六 喜多川歌麿筆



一般社団法人

東京農工大学同窓会

<https://tuat-dousoukai.org/>

TAT

農工通信 NO.100

目次

農工通信100号刊行祝辞

農工通信100号発刊に寄せて	東京農工大学学長	千葉 一裕	1
農工通信への期待	同窓会会長	栗原 績	2
農工大の“校風” 今後は？	同窓会理事長	千年 篤	3

祝【I】農工通信とともに

1. 農工通信と同窓会	高橋 幸資	農化院S47	4
2. 農工通信の楽しみ方 同窓活動の受信・発信と母校近況等を楽しむ	古賀 淳士	農学院S54	4
3. 農業の技術継承に思う —農工通信の世代間のつなぎ役に期待—	玉井 浩	農学 S57	5

室【II】価値ある体験 だから今がある！

1. 日本の梨をベトナムに	大和田 宏	農学 S31	6
2. 人生100歳時代、第3の人生で思うこと	齋藤 紀男	機械 S40	6
3. JICA インド養蚕プロジェクトに参加して	小嶋 桂吾	製糸 S42	7
4. 農業の応援団として～新米記者の10年～	和唐 博恭	製糸 S44	8
5. 医薬品とともに、49年	花輪 正明	製糸 S46	9
6. 秘湯を訪ねた思い出	峰崎 康裕	農学 S47	10
7. ぐんまの山は良いところ	小此木哲雄	林学 S56	10
8. 静岡県における豚熱（CSF）防疫対策	志村 信明	農工 S57	11
9. 就農して25年	有瀬 英憲	農学院H7	12

億【III】心に残る思い出 やっぱり農工大！

1. 工場実習	小泉 弘	製糸 S44	14
2. 「報恩感謝」	前之園孝光	獣医 S44	14
3. 東京農工大学同窓会東京都支部から	栗原 知	林学 S47	15
4. 農学科の教育に感謝	荒木 和秋	農学院S52	16
5. 農工大を卒業して	大澤 豊昭	農工 S54	16
6. 樺並木を出て40年	日置 佳之	環境 S55	17
7. 富山ねんりんピックでの思いがけない再会	深澤 光	林学 S56	18
8. 還暦に振り返る	千葉 秀幸	植防 S58	18
9. キャリアパス：将来の職業を選ぶとき、 三つの判断基準が満たせるか？	小川 史恵	機シス博H31	19
10. 青色を薔薇色に	坂口 公敏	生命博R2	20

迎【IV】ふるさとへ 是非お越しを！

1. 岡山へこられえ	山田 尚公	林産 S55	21
2. 至福のひとつきーオオシマザクラとの縁	相澤 孝夫	林学院S58	21
3. 山形で我儘気儘にラリーを楽しむ自動車部OBより	熊坂 敏彦	生機 S58	22

声【V】ひとこと言わせて

1. 誠意が却って仇（あだ）をなす経験 タイ焼きに教わったコミュニケーションのポイント	高野 文夫	化工院S53	23
2. 骨髄移植	尾中 直道	環・資 H7	23

活【VI】楽しく元気に！

1. 団塊の世代 万歳 そして更に楽しく生きるために 河村 良一 機械院S48 25
2. おいでよ！同窓会！
やろうよ！リモート呑み会！ 渡邊 快記 生シ博H19 25

コラム <キャンパス最前線>

1. 同窓会と大学の連携ロジックモデル 亀山 秀雄 化工 S48 13
2. コロナ禍での遠隔講義 滝山 博志 化工 S62 24
3. 「農工通信『百号』の節目に 新型コロナウイルスを究める
農工大学の取組に出会って」 古賀 淳士 農学院S54 26

農工通信100号特集

東京農工大学科学博物館から	27
編集者の思い	28
「農工通信」年表	32
同窓会だより	
八王子同窓会の森のこれから	37
第2回代議員選挙について	39
東京農工大学基金へのご支援について	40
広 告	42
事務局だより	44

表紙絵のことはば： 齊藤有里加（東京農工大学科学博物館 特任助教学芸員）

女織蚕手業草（じょしよくかいこてわざぐさ）六 喜多川歌麿

蚕まゆを作る図 はい子といふ 広きふたの類に椎柴などの物を敷入て ひきりたる蚕を置いてわらをおゝいにしてまゆを張すなり 四五日もして後まゆを一つゝもぎはなして取なり まゆ張物を簇（ぞく）といふなり（原文表示）

蚕の飼育から絹織物ができるまでの工程を知るために12枚の揃いものとして養蚕の様子を現した浮世絵の1枚（1798-1800制作）です。この図は繭を作る様子を示しています。養蚕を現した浮世絵は江戸から明治まで喜多川歌麿を始め、広重、国芳など多くの絵師たちによって手掛けられました。東京農工大学科学博物館では「蚕織錦絵コレクション」として故鈴木三郎名誉教授から寄贈された400点余りの錦絵を所蔵しています。

表紙の題字： 沢野 勉（農化S32）

学科・専攻略記表

略記	学科・専攻名	略記	学科・専攻名	略記	学科・専攻名
農学	農学科	製糸	製糸学科	織高院	繊維高分子工学専攻
林学	林学科	織工	繊維工学科	化工院	化学工学専攻
植防	植物防疫学科	化工	化学工学科	機械院	機械工学専攻
林産	林産学科	生機	生産機械工学科	機シス博	機械システム工学専攻博
獣医	獣医学科	機械	機械工学科	生シ博	生物システム応用科学専攻博
農工	農業生産工学科／農業工学科	農学院	農学専攻	生命博	生命工学専攻博
環境	環境保護学科	林学院	林学専攻		
環・資	環境資源学科	農化院	農芸化学専攻		

(*注：寄稿者分のみ掲載)

*学部は学科名、修士及び博士課程前期は専攻、博士課程後期は専攻博で表示。

農工通信100号発刊に寄せて

東京農工大学学長 千葉 一裕（農化院 S58）



本誌「農工通信」が1964年の1号の発刊以来その長い歴史を積み重ね、今回記念すべき100号となりますことを心からお祝い申し上げます。奇しくも二度の東京オリンピック開催年で結ばれるこの57年間の長い歳月を駆け抜けた、東京農工大学の発展の足跡を辿ることができる貴重な証であると実感しております。

この間、本学は大学院農学研究科・工学研究科（修士課程）の設置に始まり、大学院連合農学研究科（博士課程）、工学研究科（博士前期・後期課程に改組）、大学院生物システム応用科学研究所（博士前期・後期課程）の設置など、大学院教育を重点化した研究基軸大学としての発展の道を歩んでまいりました。その後、3つの研究科は教育組織として位置づける「学府」となり、現在では他大学との連携も含め全学的に各分野の博士（後期）課程はさらに充実し、高い教育力と研究力を有する大学として国際的にも広く認識されるに至りました。これもひとえに本学で学ばれ、卒業後も多大なるご支援を賜る同窓生や本学に長く貢献された教職員、関係各位のご尽力のお陰です。ここにあらためまして厚く御礼を申し上げます。

さて、本学は遡ること150年ほど前の建学以来、人類社会の基幹となる農業と工業を支える農学と工学の二つの学問領域を中心とした科学技術系大学として発展し、安心して安全な社会の構築や新産業の展開と創出に貢献しうる教育研究活動を推進してきました。新たな社会構築や産業応用といった、人類の生存基盤を支える本学の使命は、これからの激動の世界の中で、ますます重要性を増すことは間違いありません。特に昨今の感染症の脅威や食料危機、地球温暖化による様々な異常現象の中で、100億人に迫るとも言われる全人類がどのように安寧な社会を築くことができるかは、最大

の課題といえるでしょう。当然のことながら、農学、工学に関連する専門性を身につけながら、既存の概念を越えた新しい発想が必要となります。同時に、公益性や透明性、社会性、国際性、倫理観などを基盤とした知の共有化が進められ、さらには人の大切さを軸とした価値判断や自己制御の力、熱意と共に持続する力などを持ったスケールの大きな人を生み出していくことがとても大切なことだと思っています。

東京農工大学は、同窓生をはじめ、本学関係者の皆様と共にさらなる飛躍を目指します。今後とも変わらぬ温かいご支援をお願いすると共に、本学同窓会のさらなるご発展を心よりお祈り申し上げます。



農工通信への期待

同窓会会長 栗原 績 (農工 S42)



同窓会誌「農工通信」は、1964年6月に第1号が発刊され、今号をもって第100号となりました。

第1号が発刊されたのは、前回の東京オリンピックが開催された昭和39年で、私は農学部2年生に在学していました。

エチオピアのアベベ選手が、甲州街道を西へ走り、調布折返しのコースを力走したレースは日本中に感動を与えてくれました。私達は、この日レースの進行を気にしながら、農学部附属農場で測量実習をしていたことを思い出します。

農工通信には、同窓会本部の活動状況とともに、会員の慶弔、大学教員の退職、部会・支部・クラス会だより、卒業生・修了生の進学・就職先等が掲載されています。

同窓会ホームページに農工通信のバックナンバーが掲載されています。第77号(平成18年8月発行)からカラー版になり、さらに、会員の皆様からの幅広い分野での投稿が掲載されています。

静岡県支部からも、第94号に石川晴子(地生H16)さんの「林業女子会@静岡を立ち上げて」、第98号に田中賢一(工化院S43)さんの「能楽三昧」、天野弘(獣医S53)さんの「韓国との獣医学術交流を始める」等が、掲載されています。

また、第88号には卒業同期で奈良県前支部長の太田道明(農工S42)さんが「遥かなる青春の駒場寮」、第96号には準硬式野球部先輩の上野攻(林学S39)さんが「母校のルーツと大久保利通」、また、中学校同級生の速水洋志(農工S43)さんが「趣味の山登りと人生」、同窓会広報・情報部長の亀山秀雄(化工S48)さんが「創業から150年の歴史を持つ太田酒造を訪ねて」、さらに第98号には北海道前支部長の長谷川周一(農工S46)さんの「八洲秀章の生地をたずねて」が掲載されていました。

太田さんは、大阪の旧家の生まれで閉寮直前の駒場寮長も務められ、私は京都工織大との定期戦の折に宿泊させて頂き、現在、当主を務める奈良県斑鳩町の太田酒造でも、朝搾りたての新酒を飲ませて頂くなど、家族ぐるみのお付き合いをさせて頂いております。

また、卒業以来お会いしていない上野先輩は、新宿御苑が最後の職場で、今回の投稿で母校の

ルーツと大保利通公との係わりを知ることが出来ました。

農工の後輩にあたる長谷川周一さんには、親しくしている現北海道支部長の宇野澤正美さんと同期で、今回掲載された文章を見て本当に驚きました。

八洲秀章さんは、同窓会元理事長で法人化に大変ご尽力された鈴木創三先生のご尊父で、「あざみの歌」や「マリモの歌」、「山のけむり」など、多くの名曲の作曲者として知られています。

私の妻は、札幌出身で静岡県御殿場市の親戚の家に度々来ていたようで、昭和40年頃に札幌に帰る車で、函館での若い音楽関係者との会合に向かわれる八洲先生と同席し、汽車が地震発生により長時間停車したこともあり、いろいろお話も伺い、鎌倉のお屋敷での若い人達の会合にもお誘い頂いたそうです。

私は、静岡県庁に入庁し、最初の勤務地として御殿場市に勤務し、縁あって妻と結婚した頃から八洲先生との話を聞いていましたが、長年お世話になっている鈴木創三先生のご尊父とのこと、今回、農工通信のお陰で真相が分かり、ご縁の不思議さを実感しています。

第97号の編集後記に、亀山秀雄広報・情報部長が「同窓会は、卒業後も生涯に亘って、世代・専門を超えた交流と切磋琢磨を行い、大学や社会への貢献を実現するコミュニティであります。その目的を実現するために、同窓生への貢献と母校および社会への貢献という2本の柱をつないで様々な事業を進めていく上で、これからも農工通信の場を積極的に活用して頂きたいと思います。」と記されております。

同窓会は、様々な分野で活躍されている方々の集まりです。農工通信の場を活用して情報交換が進み、新たな出会いが生まれ、新たな交流・研究・事業等もうまれることを期待しております。

最後に、卒業後ケニアで活躍、その後も海外技術協力一筋に取組んできた私の同期の親しい友人が、この分野で活躍している同窓生方も多いので、留学生OBも含めて組織化できれば、大きな力を発揮できるのではと話されています。農工通信の場で意見交換されては如何でしょうか。

農工大の“校風” 今後は？

同窓会理事長 千年 篤（農学 S58）



『農工通信』100号という大変喜ばしい機会に自分が同窓会理事長を務めているとは、本学卒業時には到底想像できませんでした。私が入学したのは1978年（昭和53年）。共通一次試験制度導入の前年、国立二期校時代の最後の学生でした。ちょっと上の世代は、全共闘運動後の無気力・無関心・無責任に無感動を加えた、いわゆる四無主義のシラケ世代。我々は新人類世代のはしりでした。新歓や縦コンでの愚行・奇行に対して「ついに農工大にも新人類が入ってくるようになった」という教員の驚きもあったようです。とはいえ、地方出身者が多く、東京出身者は少数派。地方色豊かで飛び交う方言も多彩、やたら血気盛んな輩もいて、個性的な学生が多かった気がします。人生観の違いや意地の張り合いによる口論を経ながら友情を育んでいった、のどかな東京地方国立大学でした。

それから40余年を経たいま、隔世の感があります。学生の質もキャンパスの風景も大きく変わりました。大学も社会の一部ですから、時代の波の影響は避けられません。学生の多数は首都圏出身者で占められるようになり、女子学生の比率も上がりました。週末の看護学校との合コンはすっかり死語となり、キャンパス内で訛りを聴くのは希になりました。そのなかで変わらないのは、おそらく“校風”でしょう。もちろん個人差はありますが、口八丁手八丁をよしとせず、労をいとわず汗をかきながら自らの足で動く、という行動規範は脈々と受け継がれていると思います。

あくまで私見ですが、本学の養成すべき標準的人材像は、確固たる技術のもと、誇りと覚悟をもって、与えられた場所で自身の強みを発揮できる、困難に直面しても粘り強く任務を完遂する農学・工学分野の専門家だと考えています。私は「長友モデル」と呼んでいます。チームの戦術に則り、

愚直に上下動を繰り返し、味方選手のためにスペースをつくり、チャンスがあれば自ら切り込んでいける、派手さはないがチームに欠かすことのできない玄人好みの選手。そしてその実力と人間性から、多国籍軍団、名門インテル・ミラノでゲーム・キャプテンを任される存在。これこそが農工大がこれまで輩出してきた多くの人材に近い気がします。もちろん、農工大にもサッカー界の革命児であるヨハン・クライフ^{*}のような素養をもつ学生もいます。現在、本学ではそうした個性を伸ばすプログラムが用意されています。今後も「長友モデル」を標準に、同時に、出る釘も伸ばす、「クライフモデル」をも追求できる教育の場を提供していければと思っています。

「長友モデル」と「クライフモデル」。会員の皆さまは、いかがお考えでしょうか？ ちなみに、私は本学サッカー部OBです。

※オランダが生んだ世界サッカー史上屈指の強力なリーダーシップと卓越した技術・戦術眼をもった万能選手。1974年・西独W杯を席卷した“トータルフットボール”のコンダクター。FCバルセロナにおいて選手、監督として活躍し、同チームのプレースタイル（ティキ・タカ）創始者。



祝

【I】農工通信とともに

1. 農工通信と同窓会

高橋 幸資 (農化院 S47)

「農工通信」は、同窓会と同窓生を直接つなぐ唯一のツールである。そのため、会費を納付していない同窓にも送っている。同窓会創立50周年記念座談会(2010.7.2)において、名簿の発行が廃止されて同窓会と会員個人や同窓同士をつなぐ機会が薄れ、身近にとらえてもらえなくなる恐れがある、年2回発行して接点を増やすとよいと強く求められた。そこで、常務理事会の中に専門検討委員会を設け、年2回発行の骨子案を示して具体的検討を諮問した。しかし、現状の「農工通信」は好評で、年2回発行は制作担当の広報部の苦勞の割に今まで以上に会員間の親睦がよくなるとはいえない、年1回の発行のまま内容を充実させてホームページと共存を図るとの答申であった。これは諮問内容とすれ違っており、編集実務も広報部では無理と判断し、常務理事会では理事長に一任して2013年から年2回発行に踏み切ることにした。やや難産であったが、前期号は会務報告を主体にして広報部が、後期号は学外制作グループが制作にあたり、同窓の生きざまなどの諸活動を主体にすることとして、これまでの「農工通信」とは一変した84号がこうして生まれた。今回100号を迎え、今後の発展を望めるのでとても慶んでいる。

同窓会は、任意団体から一般社団法人となり公的にも認知され、「会員相互の親睦を深め、併せて同窓並びに東京農工大学の発展を図る」と謳った。さあ、目的に照らして限られた人、物、金の財源の中で永続的に会を維持し、母校にどうすることが使命なのか。母校の発展のために、現在、学生(準会員)の学会発表、コンテスト等への出場、優秀卒業論文に500万円以上援助し、同窓会でバックアップしている東京農工大学教育振興財団も、学業人物ともに特に優秀な学生の奨学に1,500万円援助している。勿論、意味はあるがこれらは特定の

学生への支援になる。もっと広く学生全体が恵みを受ける形はないか。大学の使命は教育と研究。しかし昨今、大学の専任教員が徐々に減り、学科や教科目の整理、専任では賄えない部分の非常勤講師の削減も進みつつあり、教育の質の低下がとて懸念される。財団は、大学基金に8千万円余寄附し、残余基本財産(1億円規模)を同窓会に学生援助のために寄附して解散する。そこで、同窓会が非常勤講師の任用に相応額を大学に援助し、学生全体に支援するのも1つの形ではないか。この同窓会の寄与は確かに見えにくいだが、花火のように見えるものだけが本質的貢献とは限らない。

2. 農工通信の楽しみ方

同窓活動の受信・発信と母校近況等を楽しむ

古賀 淳士 (農学院 S54)

私は、長崎県支部の連絡員を務めている関係もあり、農工通信を開く一番の楽しみは「支部だより」欄に報告された他支部の総会情報から、各地の支部活動に関する情報を入手する事です。特に、83号=平成24(2012)年9月刊=から「幹事のコメント」欄も新設され、そのお陰でいつも楽しく拝見しております。

これと同様に、「クラス会だより」欄もお楽しみのも1つになっています。特に、長崎県支部に関連するクラス会は興味深く、当支部の白井玄爾氏(農化S43)がクラス幹事として平成30年秋に開催された、卒業50年記念クラス会 IN 長崎(福江島&長崎市内)の報告【97号=令和元(2019)年8月:P37】では、お元気な先輩方と奥様のお姿を拝見できました。

また一方で、「農工通信」には情報発信の場としての楽しみ方=活用方法=もあると感じています。例えば、私が在学中にお世話になった、旧農学科の畜産学研究室は創設60周年記念式典を府中・大國魂神社で平成25年秋に開催しましたが、その模

様を幹事の青木隆夫氏（農学S51）が報告【87号＝平成26（2014）年8月：P32】されています。その後、「記念誌『色の黒い奴』と畜産学研究室OB会の活動」と題して、同じく青木先輩が情報提供【98号＝令和2（2020）年1月：P35】されています。

ちなみに、青木先輩のお父様も同窓の大先輩であり、「農学S32クラス会」報告【93号＝平成29（2017）年8月：P39】に＜幹事のコメント＞を寄せておられます。

この他にも、同期の友人や同窓の先輩・後輩の便り投稿を見つけ出しては、思い出と共に楽しく拝見させて頂いております。

最近では、新しく取組を開始された「キャンパス便り」＝農工大の今＝も興味深く拝見しております。その中で、学生時代に参加した「バドミントン部」の紹介記事【96号＝平成31（2019）年1月：P35】を見つけた時は、途中退部の身ではあるものの懐かしい思いを感じました。

最後に、地元のハス園で見つけた珍しい双子のハス花をご紹介します。約50年に一度出現する突然変異で『幸せの双頭蓮（ソウトウレン）』と呼ばれています。



3. 農業の技術継承に思う —農工通信の世代間のつなぎ役に期待—

玉井 浩（農学 S57）

私は、この3月に32年間勤めた長野県職員を退職しました。県職員時代は、農業改良普及員、果樹試験場研究員として果樹生産に携わってきました。4月からは、JA全農長野で、また果樹生産に関わることができ、幸せに思っています。

ここ数年、気になっていることがあります。そ

れは、農業生産での技術の継承です。農業だけでなく、様々な部門で技術の継承がなかなか進まず、日本の技術大国としての地位の維持のためには、今後の技術継承の必要性が言われています。農業では、担い手不足が問題となっており、担い手確保のためIターンによる新規就農者の確保のために事業が行われ、生産現場での技術継承に努めています。

生産現場を支えるJA職員や普及員、研究者等の国県職員などはどうでしょう。長野県内でも、毎年、新規職員が採用され、若い職員も多くいます。しかし、中堅どころの職員が少なく、若手職員への技術の継承がスムーズに進んでいないようにみえます。このため、研修という形でレベルアップが図られています。ただ、研修はそのきっかけに過ぎず、あとは本人の努力と周りのサポートが頼りです。

最近では、ネットなどから多くの知識を学ぶことができます。しかし、技術や経験はネットから得ることはできないと思っています（年寄りだからかもしれませんが）。先輩や上司、同僚などから直接得ることが多いのではないのでしょうか。そんな時、農工通信で先輩の話がヒントになることがあると思います。また、先輩方は若手の気持ちを知る機会が得られるでしょう。新型コロナウイルスの問題で、直に接する機会が少なくなることが心配です。

昨年、長野県の農工大同窓会「信濃同窓会」に久しぶりに出席しました。大学の同窓会というと年配の人の集まりとのイメージがありますが、当日は卒業間もない20代の若者が3人も出席していました。私とは年の差が大きいのですが、こういった席で世代間交流と継承ができると大変うれしかった思いがありました。

人を育てようとするときに心がけている言葉があります。

「やってみせ、言って聞かせてさせてみて、

誉めてやらねば人は動かじ」（山本五十六）

宝【Ⅱ】価値ある体験 だから今がある！

1. 日本の梨をベトナムに

大和田 宏 (農学 S31)

ベトナムでは韓国の梨は輸入されていましたが日本の梨は認められていませんでした。

日本の梨をベトナムに出せるようになって3年たちました。これには、農工大卒で農相やTPPの委員長をされた西川公也さんの大きな力が影にありました。西川さんはその後議員の職を離れ、内閣官房参与に就かれました。反面、そのころの農協はさっぱりでした。このことについてご紹介します。

いわきの農協に、はじめにもちかけたときは、今そこまでやっているゆとりがない、と極めて乗り気なし。栽培農家の声を直接聴きたいから、リーダー格を3人くらい紹介してくれ、と言っても動きませんでした。甘い梨を選ぶには糖度検査が必要。糖度を検査する機械は農協がもっているのですが、どうしても農協にその気になってもらわなければならない。農協を動かすのは、市の園芸振興課の係長と県の機関である「いわき農林事務所」の課長に任せることにして、私は平成28年10月、衆議院議員会館に西川公也さんを訪ねました。

ベトナムでは、韓国の梨の輸入がされているのに、日本の梨は認めていない。いわきの梨をベトナムに出したいのだが、その場合、必ずベトナムから日本への見返りのフルーツを何か要求する筈だから、その交渉を本気でやるように農水省を動かしてほしい、ベトナムからはドラゴンフルーツを要求してくるのではないかと持ち掛けました。西川さんは、リンゴとマンゴーの交換は俺がやった。今度はライチじゃないかな。やってみようと、すぐその場で秘書になにか指示していました。

翌日、秘書から「来週から現地で協議を始めます」と電話がありました。1週間たったら、また秘書から電話がきて「極めて友好的雰囲気の中で協議中です」とのこと。

これはもう大丈夫と判断し、スーツケースに梨を

一杯ぶちこんでベトナムに飛び、ここぞと目をつけた機関を訪ねてそこの幹部たちに持参した梨を食べてもらいました。どこに行っても「旨い。すぐに送れ」と好評でした。

国同士の交渉での大きな課題は、病虫害の完全防除の仕組みづくりだったそうです。桃芯食い蛾が発見されたら直ちに扱いを止めるとの条件付きで、ベトナムは日本の梨の輸入を認めました。リンゴの場合は、袋掛けのものとの条件がついたため、青森のリンゴしかベトナムには入れず、福島のリンゴは認められませんでした。今回は産地規制をされなかったため、日本の梨は茨城でもどこのものでもベトナムに出せるようになったのです。

第1号は、ホーチーミン市にあるイオンモールの店頭に並びました。その後、福島県の知事もいわきの市長も、トップセールスと称してイオンモールの店頭立ち、着々と実績を伸ばせるようになりました。去年は200トンを超えました。

西川公也さんのお力は多大なものがあります。



2. 人生100歳時代、第3の人生で思うこと

齋藤 紀男 (機械 S40)

農工大(機械工学科3期)へ入学した1961年、世界人口は約30億人で2020年は78億人です。この60年で世界は想定外の様変わり。東西冷戦後1991年旧ソ連が崩壊しロシアになり、1993年欧州ではEUが誕生。近年は中国が急速に国力を伸ばしGDP世界第2位になり米国と覇権を争う現実です。

日本は奇跡の高度経済成長で一時期はGDP世界第2でした。しかし、あの時の財を国家100年の計には生かせず、予見された少子高齢化に抜本的な政策は無く現在に至っています。少資源国は人材が最大の資源で、次世代育成は最優先政策なのに、本気で取り組まれず、貧富の格差が幼稚園から大学まで反映する教育システム社会になっています。

また大学自身、国の近視眼的な施策により大学運営は苦しく残念ながら世界的な評価は低下しています。

話は変わりますが、小学生の頃観た映画の恐竜のインパクトが強く、それがいる星へ行けるロケットに興味を持ちました。どうもそれが根底にあるのか、大学の卒論は故川又教授の流体力学研究室へ入り「ショックチューブ」実験を四宮さんと夕方暗くなるのを待ってやったのが懐かしいです。

卒業後は大学院も考えましたが、当時唯一東京でロケットを製作していたプリンス自動車（日産を経て現IHIエアロスペース）へ入社しました。1969年NASDA（宇宙開発事業団：現JAXA）が設立され、出向した後移籍することになりました。この民間でのものづくり経験は後の人生に非常に有意義でした。

NASDAでの約30年の前半は、ロケット打上げで種子島へ行くことが多い日々でしたが、その後人工衛星「きぼう」の開発、宇宙実験、地球観測等利用分野に関わる中で失敗体験もし、退職しました。その間、カリフォルニア工科大での1年間の知見や一時期母校での非常勤講師はいい思い出です。

そして第3の人生では、日本宇宙少年団（YAC）等を経て子どもたちや一般の方を対象にして、講演やイベント活動や丸の内プラチナ大学で宇宙クラスの講師をしています。

現在、日本もコロナパンデミックの中にあり、国中不安が漂っています。しかし物は考えようで、世界のIT化に遅れ将来の基幹産業が見えず国力の落ちている、日本が蘇るためのパラダイムシフトにはいい機会と考えてはどうでしょう。各分野で可能性はあると思いますが、宇宙分野についてポイントのみ述べてみたいと思います。

世界的に開発主体が国主導から民間へ変わり、宇宙ビジネスが急速に拡大しています。今年5月スペースX社は初の自社開発のロケットと宇宙船で2人を打上げ、国際宇宙ステーションへ結合し8月無

事帰還しました。この成功は一般人の宇宙旅行の意味でも画期的です。新たに宇宙活動の第三フェーズが始まり、第8次産業のスタートと思われます。

海外の躍進著しい中、日本が宇宙を将来の基幹産業のひとつにする為には、今年改訂された宇宙基本計画は意欲的でなく早急な変更が望まれます。大学現場の先生や学生の皆さんのご意見を聞いてみたいところです。



〔写真：NASDA現役時代冬の打上げ準備作業中、種子島射場の東の空に架かった虹(海は太平洋：1994年2月1日撮影)〕

3. JICAインド養蚕プロジェクトに参加して

小嶋 桂吾（製糸 S42）

私は、2004年の春、群馬県庁の定年退職を機にいわゆる第二の人生をインドのJICAプロジェクトの専門家として進む道を選択した。

インドは中国に次ぐシルク大国であるが、繭・生糸の品質が悪く、高級絹織物には品質の良い中国生糸を輸入せざるをえない状況にあった。そこで、JICA(国際協力機構)はインド政府の要請に基づき、南インド三州(カルナタカ州、アンドラ・プラデシュ州、タミル・ナドゥ州)を対象に、それまで伝統的に営まれてきた多化性養蚕(黄色繭)を二化性養蚕(白色繭)に変更し、併せて日本の持つ最先端の養蚕技術を移転してインド産の繭・生糸の品質の向上と生産性の向上を図り、もって養蚕農家の所得を向上させ、農村の貧困問題の解決の一助とすることを目的に1991～2007年までの3期16年間の長期にわたる大規模なプロジェクトが実施されたのである。

第1期；二化性養蚕技術開発計画(1991～1996)は、桑の育種と栽培技術、二化性蚕種製造技術、二化性蚕の飼育・上簇技術、蚕病防除技術、製糸技術までの技術開発。第2期；二化性養蚕技術実用化促進計画(1997～2002)は、二化性養蚕技術

の実用化と優位性の実証展示、各州に養蚕技術普及所（TSC）を配置、二化性養蚕のモデル農家の選定とクラスターの形成。このモデル農家は後に“JICA Farmer”と呼ばれた。第3期；養蚕普及強化計画（2002～2007）は、何にもまして、“JICA Farmer”を増やすことが使命であり、目標値3,600戸が設定された。

また、インド製の回轉簇の製造が新たな課題に加えられた。活動拠点は、南インド三州で最も養蚕の盛んなカルナタカ州の州都バンガロール市に中央政府の繊維省蚕糸局（CSB）があり、王宮や象祭りでも有名な同州の古都マイソール市に中央蚕糸研究訓練所（CSR&TI）がある。

その敷地内にプロジェクト活動の事務所があった。インド養蚕の多化性蚕から二化性蚕への転換は、本学の大先輩で元国立遺伝学研究所長・故田島弥太郎博士が1950年代のコロンボ計画時に指摘されており、それでCSR&TIが設立された経緯がある。正に慧眼である。

普及活動は出張や野外活動が多い。我々はCSR&TIに所属する優秀なカウンターパートと共にトヨタのランドクルーザーに乗って、バナナ園やココナッツ林に囲まれた南インドの農村地帯を駆け巡った。

南インドの気候は思ったほど酷暑ではなかったが、インドは広大で少々の用事でも一泊、二泊となることも多い。そんな中で各地のTSCで“JICA Farmer”を増やすためグループ・ディスカッションやスタディ・ツアー等の啓発活動を積極的に行い所期の目標を達成することができた。最後の課題である回轉簇の製造についてもCSR&TIと民間業者による「回轉簇共同研究組合」を設立し、インド製の回轉簇を製造して農家に供給し、使用方法の講習会を開催することができた。

当時、JICA理事長の故緒方貞子氏は二度も視察



TSCでの二化性養蚕の啓発活動

に来られた。JICA本部のこのプロジェクトの重要性と意気込みが感じられた。光栄にも第1期～第2期を対象にプロジェクトはJICA賞を受賞した。

2007年8月の終了時評価を前にバンガロール市郊外のラマナガラム生繭市場を調査し、二化性蚕の繭が多化性蚕の繭より1Kg当たり20～25ルピー（約50円）高値で取引されていることがわかった。第2期・第3期のJICA選定養蚕農家の経営調査では、農家への訪問調査時に「二化性養蚕をやって収入が増えた」「お陰で娘をカレッジ（短大）にやることができた」と笑顔で話すご主人や奥様の顔を見て、私はこの道を選択し、プロジェクトに参加して本当によかったと思った。

総じて3期16年（私は2004年7月～2007年8月）に及ぶJICAインド養蚕プロジェクトは成功事例とされ、著書にJICA研究所の山田浩司『シルク大國インドに伝承された日本の養蚕の技』（ダイヤモンド社）、産経新聞の藤本欣也『インドの正体』（扶桑社）がある。

4. 農業の応援団として

～新米記者の10年～

和唐 博恭（製糸 S44）

私は、農工大を卒業後、蚕糸関係の職員として新潟県に入った。しかし、蚕糸業がその歴史的な役割の幕を静かに下ろしていくにつれ、やがて農業改良普及員として農家の指導に当たった。その後第2の職場に6年間お世話になった。これでゆっくりと畑でもするかと思っていたある日、先輩のNさんの訪問を受けた。Nさんは「日本農業新聞の特別通信員にならないか」という話を持ってきた。同新聞の甲信越支局（*）が編集する信越版に情報提供することであった。面白そうだなという好奇心のみで引き受けたもののやり方はさっぱりわからない。そこで、一種のテストであったと思うが「伊勢神宮の式年遷宮記念の協賛公演に出演する浅野温子さんの会見」の取材を指示された。会見に参加し写真を撮り、やっとの思いで原稿を仕上げ送信したが、送信の仕方から教えてもらったり、写真を縮小しないまま送信して駐在のパソコンを長時間占有してしまったりというミスばかりであった。そして、原稿を一読した当時の新潟駐在のS記者が「なか、なか」といったまま絶句していたのが忘れ

られない。それがどういう意味であったかは未だに謎である。

とにかく新米の記者として第一歩を踏み出し、あちこちに首を突っ込んで、10年間で501編、多い年には89編の原稿を送った。担当は新潟市一円の情報で、担い手の活動を中心に取材した。特に若い農業経営者の意欲的な取り組みを意識的に取り上げた。また、新潟県、新潟市、新潟県農業大学校、新潟県農林公社等の関係機関が取り組む技術対策や担い手対策、指導、青年農業士や農村女性グループなどの活動、さらに小学校の農業体験学習、親子米作りなどの市民の農業体験、農村地域の行事など取材対象は多岐にわたった。

取材をして原稿を書きタイトルと写真をつけて送信するまでは2日かかった。掲載された記事は原文をはるかに超えて、新潟駐在の手によって読者を引き付けるものになった。さすがプロだなと唸らされたものである。

特別通信員を辞めて3年になるが、そのどれもが懐かしく、取材当時のやりとりの一つ一つが鮮やかに蘇ってくる。つたない記事であっても、農業者や農村地域が誇りと自信を持って農業に取り組むための後押しができればと願い、勝手に農業の応援団を自任して取材を続けた10年であったが、いささかでもその役割を果たせたのではないかと自負している。



新潟市内の小学校の学校教育田での田植え
(平成21年5月12日取材)

(注) *現在は信越支局

5. 医薬品とともに、49年

花輪 正明 (製糸 S46)

農工大学製糸学科に入学したわけ

私が製糸学科を目指したのは、私の祖母の実家が、金泉社という製糸業を営んでいたことにあります。ナイロン等合成繊維に押され生糸産業は衰退し、製糸工場は閉鎖されていました。そんな中、製糸工場の再興を考え入学しましたが、製糸学科には経営管理学講座があり、生糸より経営工学に魅かれゼミは松行研究室に入りました。信念なき私でした。

塩野義製薬に入社したわけ

就職を考えた時、母が相続した京都の家を私にくれるというので、これはラッキー、家を建てなくて済むとの思いから、関西系の企業に就職しようと考えました。父にそのことを話すと、大阪なら製薬会社だ、御三家といい、武田、塩野義、田辺だと言いました。そこで、武田薬品と塩野義製薬が同じ日本橋界隈に東京支店がありましたので、お伺いし応募要領を頂き、早速両社に応募しました。採用試験は塩野義製薬が最初で、試験翌日には内定を頂き、塩野義製薬がどんな会社かも知らず入社を決め、今考えると無責任極まりない、ここでも信念なき選択でした。

塩野義製薬に入社後は

塩野義では解析センター配属を想定して入社したところ、最初は病院現場を経験することと言われ、研修後に茨城県に赴任しました。営業を始め2か月後、やはり営業は耐えられないとの思いから、支店長に、解析センターにかえて欲しいと、怒られるのを覚悟の上申し出ました。しかし、それを聞いた支店長は、「おっ、そうか、それならいつでもかえてやる！」と、あっさり言われ、度肝を抜かれました。そして「でもな、どんな職場でも合わないことはあるもんだよ、現在をやり抜いたうえで他の場所に異動しないと、新たな部署でも耐えられず逃げたくなり、人はな一、逃避癖がつくもんだよ！」と、言われました。その言葉に、私もそうだなと思い、「よし、営業で頑張ろう」と気持ちを切り替え、営業に全力を注ぎました。すると営業成績は全国的にも目立ち、東京へ異動となり慈恵医大病院11年半、昭和大学病院8年半担

当し営業成績絶好調を貫いていた入社23年目に、青天の霹靂がおこりました。

営業から新薬申請等の対応へ

平成5年9月に、今までとは全く違う新薬申請業務へ異動となり、60歳となる平成20年9月の定年後も雇用は継続され、シオノギ勤続49年を迎えています。今は、勤続50年、半世紀社員を目指しもう少し頑張りたいと思います。思い返すと、薬学部卒でもない私が塩野義製薬に入社し、医薬品に一貫して関わり続け、日本薬学会、日本臨床薬理学会、日本医療薬学会の3大薬学系学会で、座長や演者を経験させて頂き、さらに医学部卒でもないのに癌治療学会、脳卒中学会、小児科学会、泌尿器科学会等年会では教育講演をさせて頂き、患者さんに貢献できたことは、今思い返しても充実感を感じ、大げさな言い方で恐縮ですが、「我が人生悔い無し」を、感じているところです。

6. 秘湯を訪ねた思い出

峰崎 康裕 (農学 S47)

学生時の自由さで前後期の休みにひとり旅をしたのが良き思い出になっている。国鉄の周遊券とユース hostel 利用を条件に、ガイドブックを頼りに単なる観光にならないようにとコースを考えるのも楽しみだった。

信州・木曾路、大阪万博と中国地方・隠岐、四国、九州・屋久島と多くはない旅だが、記念の写真もなく、ガイドブック等も処分し、今思うと残念だが旅の記録が何もなく、それぞれの旅程など記憶も曖昧になってしまっている。

そんな旅のうち2年次昭和44年の夏だったと思う。信州・木曾路を辿った時に目玉企画としたのが王滝村の濁川温泉である。御嶽山南麓を流れる王滝川支流の濁川にある。交通の便がすこぶる悪く、電気もないという秘湯である。

国鉄で上松まで行き、王滝森林鉄道に乗った。木材輸送専用だが、王滝村はじめ地域の住民たちの協力によって、建設・運行されていたため、住民の日常生活にも利用され、当時は観光客も乗車できる定期列車が走っていたのだ。乗車の際には乗務員から「生命の保証はしない」という説明をしていたとある（ウィキペディアより）。そんなこ

とを言われたか覚えていないが、険しい崖の縁や深い森の中を延々と走ったことを思うと納得させられる。最寄りの駐車場から、教えられた道だけ廃線跡だったかをかなりの時間歩き、やっと見つけた看板に従って、谷底へ約20分細い道を下り、二階建ての温泉宿にたどり着いた。

泊まり客はほかに2人組の女性だけで、夕食は囲炉裏を囲み、ランプの明かりの下でご主人の話を聞きながらのものであったと思う。お目当ての湯屋は川のすぐそばの離れで、宿の端から屋根付きの階段で繋がっている。杉の木の浴槽は小石がごろごろした底から湯が湧き出ている。鉄分で茶色く濁った湯はかなり温かめでご主人の勧めに従い、月明かりでほの暗い中、川の流れの音を聞きながらゆったりとした時間を過ごした。

いま一度行ってみたい所だが、どう願ってももう経験することはできない。森林鉄道、温泉ともに今はもうない。鉄道はこの旅の数年後、昭和50年5月に廃線となり、温泉は昭和59年9月14日の長野県西部地震で深さ50メートルもの土砂に施設もろとも飲み込まれて消滅したのだ。本当に残念で仕方がない。この時後継者の経営者一家4人が犠牲になったとのことで、ニュースに接し大きな衝撃を受けたことを思い出す。改めてご冥福をお祈りします。

7. ぐんまの山は良いところ

小此木 哲雄 (旧姓木暮) (林学 S56)

「シュホ、シュホ、シュホ」ヤマブドウの太い蔓を切る音、イワナのいるせせらぎの音だけが聞こえる。樹齢70年、80年の杉の人工林、この沢沿いの傾斜地は、鹿、猪、ツキノワグマが住む群馬県利根郡川場村の標高1100mの山の中である。高



級な籠の材料となるヤマブドウ蔓の皮を採取する。6月中旬から1か月間だけが蔓の皮がむける適期で、朝から夕方まで山の中を歩き回り、蔓を探し、木に登り、切り、皮を剥ぐ。今日は6人で2人ずつ組み、私はベテランの長老（77歳）と一緒にだ。私が木の下で、長老は梯子と木登り道具を駆使して、「これが命、これが命・・・。」と言いながら道具をしっかりと木に固定しながら10m位まで登る。逞しく締まった体躯は、力強く、身のこなしは、森の人（オランウータン）といった感じ。長年、森林組合で木を伐ってきた人で、一方の私はほとんどデスクワークで過ごしてきた61歳の若造。長さ10mを超える太い蔓は20kg以上あるだろうか。足場の悪い斜面で運ぶには危険を伴う。アドレナリンによるものか、興奮し、テンションを上げ、体の機能をフル回転させなければケガをする。思えば山の作業を初めて教わったのは農工大林学科の時の草木演習林である。チェーンソーによる伐木、枝打ち、下草刈りなど体験し、作業員の方々から山の楽しさ、苦労話など多くのことを学んだ。作業小屋では「唐辛子いっぱい白菜バター炒め、焼いて食べさせてくれたヘビの肉」、・・・そして何よりも、ともに合宿所で毎晩酒盛りをして語り合った林科の皆、先生方、実に楽しく充実した日々であった。そんな記憶が一気によみがえる。・・・長老は物静かで山の仕事を低く野太い声で教えてくれる。強さと優しさを持ち、自然とともに生きる人間らしさを感じさせてくれる。自分には何ができるだろう？自然の中での仕事は肉体には堪えるが魅かれる仕事である。私は大学卒業後、地元群馬に戻り、県庁生活38年、ダム、河川、道路、公園の仕事に携わり、今は親から引き継いだ田畑、山林の管理をしながら、2020年3月に完成した八ッ場ダムがある長野原町で観光、地域振興の仕事をしている。50半ばで大病を経験し、健康の大切さを痛感した。生かされている私、家族や仲間とともに、喜怒哀楽のある日々を過ごしたい。できればドーパミンを感じる時間が長く・・・そして逞しく、優しい農工大出身の皆様の幸せと世界の平和も併せて願いつつ。

8. 静岡県における豚熱(CSF)防疫対策

志村 信明（農工 S57）

私は、昭和57年に農業工学科を卒業し静岡県庁に農業土木技師として入庁後、主に農業農村整備（土地改良）関係歩んできました。昨年、農林水産担当部長となりましたが、この1年間（現在も）は「豚熱（CSF）防疫対策」に明け暮れた年でしたので、その経験をご紹介します。



〔CSF防疫対策本部会議〕

一昨年の9月に岐阜県で発生したCSF（当時は豚コレラ）は、昨年2月には、愛知県田原市の養豚農場にも拡散して本県にもあと一步と迫りました。すぐに防疫対策として県予算の予備費を充当して、湖西市の県境に消毒ポイントを設けました。というのは愛知県から本県に出荷されてくる豚が相当数あり、交差汚染を防ぐためであります。

その後も感染拡大が続いたことから、県議会の支援もいただき、補正予算において、養豚農場への防護柵の設置や消毒の徹底、消毒ポイントの増設、猟友会等の協力を得て野生イノシシの捕獲強化、経口ワクチンの散布などの施策を次々と打ち出していきました。その間、他県での発生に関する情報収集、養豚農場への指導など、畜産振興課をはじめ関係職員は土日ほとんど休めない献身的な対応をしてくださいました。それを支えたのは、本県の養豚農場では絶対にCSFを発生させないという強い思いでした。

その後も感染拡大が続いたことから、県議会の支援もいただき、補正予算において、養豚農場への防護柵の設置や消毒の徹底、消毒ポイントの増設、猟友会等の協力を得て野生イノシシの捕獲強化、経口ワクチンの散布などの施策を次々と打ち出していきました。その間、他県での発生に関する情報収集、養豚農場への指導など、畜産振興課をはじめ関係職員は土日ほとんど休めない献身的な対応をしてくださいました。それを支えたのは、本県の養豚農場では絶対にCSFを発生させないという強い思いでした。

そうした状況で、埼玉県の養豚農場で感染が確認されて初めて、国は10月に飼養豚への予防的ワクチンの接種に踏み切ったのです。本県では接種が認められていなかったのですが、突如10月18日に県中央部の藤枝市で死亡した野生イノシシから感染の第1号が発見されたのです。これには戸惑いました。何故なら、愛知県境を重点的に捕獲強化と検査を実施してきた過程では1頭も発見されなかったからです。感染ルートが想定と異なっていたことには、さすがに緊張が走りましたが、た

だ不幸中の幸いは発生場所周辺に養豚農家がなかったということです。これにより本県における飼養豚への予防的ワクチン接種が認められ、すぐに知事を本部長とする県のCSF防疫対策本部を立ち上げ、国との調整を経て11月3日からワクチン接種をはじめたのです。

周りを囲まれた状況で、これまで養豚農場でCSFの感染を発生させなかったことは本県の誇りと考えています。この間の皆様のご支援ご協力に深く感謝しています。しかし、油断は大敵です。新たに生まれる子豚への接種や親豚への追加接種は継続して必要であり、野生イノシシでの感染は依然として拡大しています。今後も万全の態勢で臨んでいきます。

9. 就農して25年

有瀬 英憲（農学院 H7）

大学を出て就農してから、25年が経とうとしています。

現在、熊本県で両親、妻、4歳になる娘との5人暮らしで、イチゴと栗の複合経営を営んでいます。また、地元の農事組合法人の役員もしており、水稲の作業受託を担当しています。



〔私の家族、我が家にて〕

農工大での一番の思い出は、学部3年から修士課程までの4年間を過ごした、農業生産技術学講座での日々です。下田博之先生や、塩谷哲夫先生をはじめとする諸先生方や農場技官の方々、そして素晴らしい研究室の仲間たちに恵まれ、充実した毎日でした。私のフィールドは府中本町農場の水田で、水稲の無農薬栽培の研究をさせていただきました。稲の生育はもとより、雑草や昆虫、水

中生物など、水田を丸ごと観察できた経験は、今でも私の宝物です。

卒業後、これからの時代は、大学を出た者が農業経営者になっても良いのではないかと思い、就農を決意しました。意気込んで就農してはみたものの、当時の我が家の経営規模は小さく、収入は不安定でした。それでも、4Hクラブや農協青壮年部など、いろんな組織活動には積極的に参加していききました。そのおかげで、つらい時にも相談できる仲間が出来、苦しい時期を乗り越えられました。

また、毎年夏には、現役の農工大生が泊りがけで実習に来てくれ、我が家を明るくしてくれました。

就農して5年目に、一念発起してハウスを建て、イチゴの栽培を始めました。それからは、少しずつ経営が安定し始め、40歳を過ぎてようやく結婚、長女の誕生、そして現在に至っています。

結婚式には農工大の恩師の先生方や同僚達が遠方から駆けつけて下さり、夢を見ているような気分でした。

農業は自然相手の仕事ではありますが、同時に人相手の仕事でもあります。お米を作るにしても、水利組合や、農家振興組合に所属しなければなりません。また、いろんな補助事業や交付金も活用しなければ、安定した経営を持続することは難しいと思います。ただ畑を耕すだけではなく、地域の方々や、JA、行政機関の方と信頼関係を作ることも仕事のうちだと思います。そして当然の事ですが、食べていただく消費者のことを忘れてはいけません。

私も50歳を過ぎました。これからは、農業後継者の育成にも力を入れたいと思っています。今年からは、地元の農協の理事になりました。これまでお世話になった方々への恩返しの気持ちも込めて、思いっきり大暴れしたい、今はそんな心境です。

同窓会と大学の連携ロジックモデル

同窓会広報・情報部長 亀山 秀雄 (化工 S48)

農工通信100号を記念して、ロジックモデルを用いて同窓会と大学との10年後の姿とそこに至るまでのアウトカム、そして2021年のアウトプットを描いてみます。ロジックモデルは別名「道筋」と呼ばれて、内閣府が平成28年12月に「国の研究開発評価に関する大綱的指針」の中で研究開発プログラムの評価の仕方として示している方法です。古くは1971年に米国の国際開発庁が用いたのがはじめとされているので、今から50年前から用いられている手法です。

外部環境 国の財政改革に端を発して、国立大学への運営交付金がこの10年間で約1,500億円減らされる中、国立大学における40歳以下の若手教員が1,400名以上減少し、任期付きの割合が約25%上昇している。学内業務の負担や競争的資金の獲得業務負担が増え、大学の教員が研究に割り当てる時間が約14%減少している。その結果、論文の量や質の国際ランキングが急速に低下している。IMD世界競争力ランキングも2020年は38位と1997年以降最低を記録している。国は統合イノベーション戦略や研究力向上革新2019などの方針を打ち出しているが、大学側はその対応が遅れている。

インパクト 10年後の農工大学は、同窓会との連携を密にして、研究と教育活動に関して全国的な協力支援体制を構築している。その結果、外部資金獲得5倍となり博士課程修了数や若手研究者数が2倍以上になり、学生の就職も常に100%が達成されている状態となっており、論文数や質の教員当たりの評価で国内トップに位置し、アジア大学ランキング総合で50位以内、国際ランキングも200位以内に入る大学になっている。

長期アウトカム 2027年頃には、大学と同窓会の研究と教育活動に関しての連携による成果が明確になり外部資金額、若手教員数、博士学生の財政支援、教員当たりの論文の数と質の伸びが7%以上になっている。

短期アウトカム 2024年頃には大学と同窓会の研究と教育活動に関しての連携関係が全国的に行われるようになり、外部資金額、若手教員数、博士学生の財政支援、教員当たりの論文の数と質の伸びが5%以上になり、競争的資金獲得額は2020年時点の2倍の増加になっている。

戦略 農工大学内の強みである学内の農学と工学の連携による科学技術イノベーション体制と同窓生による地域社会およびアジア地域そして行政分野での学術、産業、政策活動との有機的な広域連携を生かして、外部資金の獲得、地域連携、国際連携、学生への奨学および就職支援活動を組織的に行う。

アウトプット目標 外部資金獲得額、博士課程修了数、若手研究者数、産学連携コンソシアム数、学生の就職率、教員当たりの論文の数や質、アジア大学ランキング、国際ランキング、政策への貢献、産業への貢献などを評価指標としてアウトプットを評価する。

アクション 大学と同窓会の主要メンバーからなる作業部会の設置。農工大学と同窓会が連携した2025年ビジョンと2030年ビジョンの策定、大学と同窓会との連携支援データベースの構築、全国の支部に大学連携委員を置き、テレビ会議等による連絡体制の構築、大学と同窓会による連携通信のYouTube配信体制の構築、大学の強みと地域や行政のニーズを紹介するWEBによる農工通信の配信などを行う。

活用資産 同窓会の運営体制と支部活動や部会活動の成果、国内外における同窓生の人的ネットワーク、後援会基金

このようなロジックモデルを同窓会と農工大からの委員で協力して策定する作業部会を作り、大学と同窓会で承認して計画を実行すれば、2030年でのありたい姿（インパクト）が実現することでしょう。Society5.0の新しい社会での農工大と同窓会の連携による発展を願っています。

憶【Ⅲ】心に残る思い出 やっぱり農工大！

1. 工場実習

小泉 弘 (製糸 S44)



鐘紡の相馬製糸工場でした。主な仕事は糸をガイドする動かなくなった鼓車の清掃・整備

でした。夏休みの10日間位、500円の日当が出ました。虎ノ門の外務省のアルバイトで千円の時代でした。民謡大会に出る人の応援で、常磐ハワイアンセンターにバスで行ったり、海水浴へ行った思い出があります。工場長は、繭から糸をとる前の煮繭機で最適な「ほぐれやすさ」を研究されていました。私は操糸機の本は何粒の繭がついているかを調べた日がありました。普通は7～8玉位なのですが、どのような分布になっているかの資料を取るためでした。

この時の工場内の品質検査で太さの均質の格が最高のAAAとなったと後で聞きました。従ってこの調査・サンプリングは不適正ということになります。調査に関しては、従業員に対して何ら不利益をこうむるものではありません。彼女等は繭の特性を熟知した職人なのです。ほどくと1km以上ある繭は、はじめは太く、しまいには半分以下になってしまいます。最後はサナギが見えるようになり、うまくいけば完全に糸がはがされサナギがでてきます。薄くなった時点で繭の変形などによって正常にほぐれなくなることがあります。この不均一の繭糸を束ねて均一にすることが求められています。

この工程で、如何にして生産性を上げるか？については、ヒントが隠されていると思います。組織革新研究会主宰・藤田英夫氏著作『状況が人をうごかす』『人を人として』を参考にして下さい。

卒論は経営の組織論でした。季刊の学術誌『組織科学』が発行された時期でした。『ソニーは人を

生かす』などの人間行動学の本が出版されていました。野球の野村克也監督や箱根駅伝で連続優勝に導いた青山学院大学の監督等のリーダーの育て方です。

製糸学科が生命工学科に変更になったと、同窓会で知りました。ポストゲノムは糖鎖だと、15年位前に聞きました。最近、新型コロナウイルスの記事で、糖鎖の文字を見つけました。糖鎖は8種類の糖（ツバメの巣に多く含まれている・女優さんが愛用・赤ちゃん肌に）でできていて、1つの細胞に五万個生えているということです。糖鎖の組み合わせで血液型がきまるそうです。YouTubeでごらんになって下さい。正常な細胞と糖鎖であれば、ウイルスを撃退することができます。研究の課題は豊富にでてくることでしょう。ノーベル賞をめざし研鑽されることを祈念いたします。これからも悩ませられることになると思われませんが、自然破壊を抑えて、ウイルスと共生していくことになるでしょう。

2. 「報恩感謝」

前之園 孝光 (獣医 S44)

同窓会誌「農工通信」は1964年6月（東京オリンピック開催年）に第1号を発行以来、2021年1月発行で節目の100号を迎えました。

誠におめでとうございます。原稿の依頼を戴き、私も大学を1969年（昭和44年）卒業して約50年になりましたことから少し自己紹介を兼ねて、僭越ながら執筆致しました事をお許し下さいますようお願い致します。

昭和44年（1969年）に獣医師として全国酪農業協同組合連合会に就職、宮城県で酪農家の乳質改善、繁殖障害、ケトosisの治療など臨床獣医師として4年間勤務後、千葉県庁に昭和48年（1973年）入庁、酪農試験場勤務。

日本酪農発祥の地、嶺岡乳牛研究所長を最後に

平成19年3月（2007年）定年退職致しました。その後、先輩方の配慮により千葉県畜産協会、千葉県酪農農業協同組合連合会に勤務しました。酪農関係者や同窓会の皆様には、大変にお世話になりました。

2011年12月から地元の大網白里市議会議員として8年間、奉職致しました。

現在、同窓会千葉県支部長を、仰せつかっております。総会には、約100人の同窓が集い、お互いの交流の場となっています。同窓会本部からも出席を頂き、大学の現状などを伺い元気をいただいております。改めて御礼申し上げます。

2020年、「新型コロナウイルス」が、世界的な感染拡大（パンデミック）で、人の出入国も制限され、世界の経済は大変な状況です。世界の市民の健康の為にも、検査の迅速化、ワクチンと治療薬の開発が望まれます。人類は食料の確保と病気との戦いを乗り越えてきました。一日も早い収束を期待しています。

結びに、進化論を確立した自然科学者チャールズ・ダーウィンが残した言葉を紹介します。

強いものが生き残るのでない。賢いものが生き残るのでない。

変化に敏感なものだけが生き残り、成長するのだ。

目まぐるしく変わる時代ですが、これらの変化に対応する為にも基本（生命の尊さ）を根本に生活（生命活動）、経済（経世済民）を改善したいものです。

そのためにも、東京農工大学の果たす役割は大きいと考えております。

東京農工大学同窓会の益々の発展と会員、関係者の皆様のご健勝とご活躍をお祈り致します。



酪農のさと



日本酪農発祥之地、嶺岡乳牛研究所

3. 東京農工大学同窓会東京都支部から

栗原 知（林学 S47）

新年あけましておめでとうございます。

併せて「農工通信100号」発刊、誠におめでとうございます。同窓会東京都支部からお祝いを述べさせて頂くと共に、東京農工大学同窓会の今後の益々のご発展を祈念申し上げます。

●2020年を振り返って

2020年は、年初から新型コロナウイルス感染症拡大により世界中が大混乱に陥り、人々の生活や働き方も大きく変わりました。

今まさに、時代として大きな転換期に差し掛かり、この「ゆっくり進む大規模自然災害」に対して世界中の英知を結集し、非常事態に対峙すべき時ではないでしょうか。

世の中には、地球規模の環境破壊、資源枯渇、食糧危機、感染症拡大、AI・ロボット化等々、東京農工大学に関係ある課題に溢れています。今後ますます、東京農工大学が社会に貢献する学問・研究の分野におけるプレゼンスが高まり、同窓会の役割も大きくなると思います。

●同窓会東京都支部の今後の活動

・昨年6月に長年にわたって同窓会東京都支部を牽引された、馬場支部長と畠山副支部長がご退任され、小生（栗原 知（林学S47））が新支部長となり、副支部長をこれまで連絡員としてご協力いただいていた稲田さん（地生H17、院H19）に引き継いでいただきました。これまでのお二人のご貢献を基に新たな活動方針を模索している段階です。今後とも皆様方のご協力とご

鞭撻を賜りたいと存じます。

- ・2020年1月に東京都支部のホームページ (<http://tuat-reunion.tokyo/>) を開設しました。10,838名(2020年3月31日時点)を抱える東京都支部の新しいコミュニケーションツールとして、活用していく所存です。是非、一度ご覧いただけると幸いです。皆様からのご意見をいただきたく存じます。
- ・新型コロナウイルス感染症の収束が前提ですが、東京都支部の定例会も企画しています。また、東京農工大学工学部発祥の地である帝国ホテルで同窓生の交流会も企画したいと考えています。詳細につきましては農工通信101号と同窓会東京都支部ホームページに掲載します。

今後ともこれまで同様、同窓会の伝統を守りながら、新たなネットワーク作りが出来ないかを模索し、支部会員相互の情報発信・交換・交流を通じて東京都支部の新たな活性化、同時に母校への貢献が出来る事を希望しています。

各支部・各同好会及び同窓生の方々からのご意見などを東京都支部ホームページへご連絡頂けたら幸いです。本年もよろしくお願い申し上げます。

4. 農学科の教育に感謝

荒木 和秋 (農学院 S52)

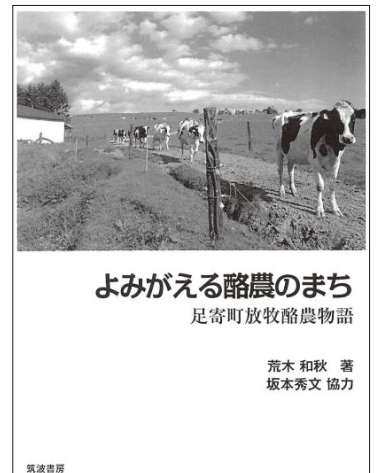
私は、北海道で30年余りの大学勤務を終え、今は執筆活動と札幌近郊の農家の圃場で日本初の有機子実とうもろこし栽培試験を技術研究者と取り組んでいます。国内で消費されるとうもろこしはほぼ全量が輸入ですが、最近、道央地域で作付けが増えてきました。その要因は、①転作物の連作のため病気が発生したことで新たな輪作作物として、②深根性を利用した水田土壌改善、③収穫後の残渣物の有機物としての活用、などです。さらに、④農家が所有する大型機械で省力的に栽培できることからです。

道内では有機とうもろこしが網走地域で有機酪農の飼料として栽培されていますが、積算温度が少ないため実が十分入らずWCS(ホールクroppサイレージ)やイアコーン(雌穂=俵)の利用に

留まっています。そこで積算温度が十分ある道央地帯での試験栽培に取り組んでいます。幸い、道央地帯では病害虫が少なく、これが本州に行くと高温のため病害虫の防除に農薬が使用されます。残る課題は除草ですが、その技術はすでに網走地域で確立し、とうもろこしの出芽前からカルチ作業機と特殊な付属機を使って行います。この技術を道央の試験圃場にも導入し、すでに1年目は成功し、2年目の試験を行っています。

試験栽培には作物学、土壌学、肥料学、農業機械学、農業気象学などの知識が要求されますが、それらすべて大学時代に授業で教わったものです。真面目に勉強しなかったものの頭の片隅には残っており、それらが今になって生きています。

私の専門の農業経営学は恩師の故梶井功先生(元学長)から教わり、農村調査でも農業地帯の構造分析手法を学びました。本職である大学での調査研究や学生指導に生かしてきました。その成果を今年6月に本にしました。日本酪農を変革する本です。農家の生き様を通して放牧の技術的、経済的優位性を証明しています。農工大での授業やご指導に感謝する毎日です。



5. 農工大を卒業して

大澤 豊昭 (農工 S54)

卒業後、県職員として大過なく勤め上げることが出来たのも、ひとえに亡き父母、家族並びに多数の方々のお陰と常々感謝の念に堪えない。

当時、最初に思い起こされるのは、受験の下見の際JR国分寺駅近くの交番で、大学の場所を尋ねた所、ほんの目と鼻の先であるにもかかわらず、大学名すら分からないと言われてショックを受けたことである。

学生時代を振り返ると、勉学とは程遠くよく卒業できたものだとしみじみ思う。考える

に周囲の仲間たちの助けによるものだったと変に納得している。

学科全員が30人と少人数で（それぞれ個性的な面々で、紅一点のぽっちゃり美人のHちゃんが唯一の救いだった）、また大学のキャンパス自体は狭く、さらに当時は大学構内や学科の研究棟などへの出入りも自由な環境であったが故に、学校に居ればいつでも誰かと出会え、自然と勉学以外でも幅広くかつ深く交流でき充実していたとつくづく思う。同級生に至っては、今でも一人一人の名前や顔（不思議と笑顔が思い浮かぶ）その性格までもが数々のエピソードと共に今でも鮮明に甦る。例えば、歓迎コンパでのA君の救急車騒動を皮切りに、学科対抗のソフトボール大会、夏休みW君のN県の別荘でのテニス三昧、T君の父上から頂いたとれたてセロリのおいしかったこと、M君やO君をはじめ数々の同級生の下宿巡り、農場や屋上での酒盛り、農場のS先生ほか研究室のS、O、S、A、Kなどの諸先生方や留学生のTさん等との貴重な交流、W先生のアドバイスによる卒業前の米国西海岸への旅行等々枚挙にいとまがない。

卒業当初は、同窓会や結婚式、出張等で旧交を温める機会も多かったが、それぞれ家庭を持ち、仕事も忙しくなるにつれ徐々に疎遠になっていった気がする。

一昨年、久しぶりに同窓会兼K君の七回忌で東京及び栃木に連泊し、K君のご冥福をお祈りすると共に昔話に花を咲かせた。後日S君の訃報を知り改めてご冥福をお祈りした次第である。

今後2年毎に同窓会を開催することとしたが、新型コロナ禍（人との繋がりがいかに大事かを痛感している）で順延となり再会が待ち遠しい。

本学は、卒業生が少ないがゆえに同窓と聞くと不思議と親近感を覚える数少ない大学と自負しており、人との付き合いが特段苦にならないのも当時の人間関係に起因するものだと思うにつれ農工大卒でよかったとつくづく実感する。



生として昭和51年に入学しました。自分の入学年次にちょうど1年生から4年生までが揃ったことになります。環境保護学科は、当時社会的に大きな問題となっていた公害と自然破壊に対処する教育研究を行うために新設された学科でした。社会的に注目を浴びていたためか受験倍率は高く、私の時はたしか10倍でした。入学してみると、公害などの解決を志す学生が全国から集まっており、日夜、学生間で社会問題について議論が戦わされていました。学科は、自然保護（実際は野生動物保護管理）、植生管理、土壌水界環境、生物汚染化学、大気環境（実際は植物生理）という5講座体制、しかし、実際には旧林学系と化学系等の寄せ集めではないかという疑問も湧き、学科のあり方を議論するために「環境保護学科新聞」が刊行され、講座間の風通しを良くするための記事が書かれたりしました。随分、学科思いの学生だったようですが、それだけ新設学科に対する期待が大きかったのだと思います。

3年生になると学生はそれぞれ研究室に入りました。私は植生管理学研究室で奥富清先生に師事し、小笠原諸島の植生図作成というテーマで研究に取り組みました。先生直々の現地小笠原での指導は、今思うと、とても贅沢な時間でした。1年半寝食を忘れるほど没頭して完成させた植生図は、その後、小笠原空港の環境影響評価や世界自然遺産登録の基礎資料としても使われることになり、なんとか入学時の環境保護への志を果たすことができた思いです。卒業後は、植生学の応用を志して、信州大学農学研究科に進学し、亀山章先生の教えを受けました。しかし、事情があって1年中退し、東京都に造園職として勤めました。都庁で12年余り自然保護行政などに携わった後、縁あって建設省土木研究所で自然再生に関する研究

6. 樗並木を出て40年

日置 佳之（環保 S55）

私が農工大を卒業してちょうど40年経ちました。私は、昭和48年に新設された環境保護学科の4期

に取り組みました。私はその研究を取りまとめて、2000年に農工大連合農学研究科に学位請求論文として提出し、信州大から農工大に移られていた亀山先生に主査になって頂いて審査して頂きました。その後、鳥取大の教員になり今年で20年勤めています。特殊な専門知識と技術を身につけてささやか乍ら世に貢献出来たのは、農工大と2人の恩師のお陰と、増々高くなったはずの櫛並木を思い出しながら感謝しています。

7. 富山ねんりんピックでの思いがけない再会

深澤 光 (林学 S56)

高校1年生で肺結核を患ったため、高校の3年間は体育もまともに出来なかった私は、大学入学後無謀にもラグビー部に入部するも、大学2年生の夏合宿でリタイヤ。中途退部の後ろめたさから解放されることは今もない。



当時の林学科では、3年生進級後すぐに所属研究室を決め、私が入った造林学研究室では、3年生は4年生や大学院生の弟子になって、卒論研究のための測定や実験器具の洗いもの手伝いなどをして研究の進め方を学び、自分の卒論研究に入る、という徒弟制度があった。特に実験器具の洗いものとなると膨大な量なので、自分の卒論テーマとは関係なくても研究室の先輩の仕事を手伝う、という自然に醸された風土があった。

特に印象に残っている先輩の一人に、私と同じ東京都出身であって、卒業後いきなり縁も所縁も無い富山県の職員になられた相浦英春さんがいらした。県の林業試験場の研究員となられていた相浦さんとは、卒業後1回だけ学会で盛岡にいらした際に他の先輩方と一緒に飲んだことがあったが、たまに研究報告などを拝読して、「元気にされているな」と思い出す、その様な少し疎遠な関係になっていた。

大学卒業後岩手県に奉職した私は、ラグビーへの思いが断ち切れず、たまたま岩手大学のグラウンドで試合を見ていたところ、そこで試合をしていたクラブチームの監督に拾ってもらい、20代後半には何

とかクラブリーグで試合に出られるようになっていた。4代になると同じ監督から、不惑クラブ(40代以上のチーム)に誘ってもらい、痛い思い出もしながらラグビーを楽しんできた。

下手でも辛くても続けていれば良いこともあるもので、59歳になった一昨年、富山県で開催されたねんりんピックに岩手県チームの選手で出場させてもらう機会を得た。富山県で知っている方は、相浦英春さん一人だけ。相浦さんは、学生時代バスケットボールをされていたので、開会式などでお目にかかる機会があるかも、というくらいの気持ちでいたところ、何と魚津市のラグビー会場で選手としてラグビーに、それも同じポジションで出場しているではないか。これには本当に驚き、感激した。

チームで飲んで、と富山の美酒の差し入れを頂き、グラウンドでお互いの試合を応援した。このような素晴らしい再会の機会に与えることが出来たのも、ラグビー初心者であった私に初歩から教えてくださった本学ラグビー部の先輩はじめ皆様のお蔭と心から感謝している。

8. 還暦に振り返る

千葉 秀幸 (植防 S58)

1983(昭和58)年3月に卒業後、40年近くキャンパスはおろか府中さえ訪れたことがない。昨年10月同期生から2020年4月にS58卒植防同期会をするからぜひ参加してほしいというハガキが届いた。参加を決め、航空券の予約もしたのだが、新型コロナウイルスによる非常事態宣言で没になり学校訪問のチャンスが潰れてしまった。

大学生活一番の思い出は、最後の日すなわち卒業式だった。卒業式で学長が何を語ったのかなんて覚えている人はそう多くはないだろう。今では簡単に動画が撮れ、いつでも思い出を振り返ることができる。しかし当時は写真ですら現像するまでどう撮れているかわからなかったし、昨今のように卒業式は保護者同伴でなどということもなかったのも、写真一枚すら残っていない。にも関わらず、私は諸星静次郎学長が語ったことを忘れることができない。京都大学の阪口浩平教授がライフワークである『図説世界の昆虫』全6巻を完成された。しかし、そのために視力を失った、と

いう話だった。これにはちょっと驚いた。というのは坂口さんとは知り合いで、この図鑑にもほんの少しではあるが関わったことがあったからである。

大学時代はどちらかといえば不真面目で、好きな昆虫の授業だけは1科目を除き（この件については後述）Aをもらったが、あとは悲惨な状態だった。卒業したら日本を脱出し海外の大学院に行く決めていたので、どこの研究室にも所属せず卒業もなし。3年で単位は揃っていたので、卒業できないかと掛け合ったが、4年間在籍する必要があると拒否された。4年生の時は大学へ行く必要がなく留学費用を稼ぐためアルバイトに勤しんだ。大学での勉強には興味が湧かず、高校生の頃から本格的に始めたセセリチョウの分類に没頭していた4年間だった。そんな状態だったので、諸星学長のことばには本当に励まされた。大学でははみ出し者だったが、阪口教授ともそれを通じて知り合いになり図鑑のお手伝いもできた。それはそれで良かったのだと大学生活最後の日に言ってもらえたと思っている。

さて、昆虫関係のBであるが、それは「昆虫生態学」だ。農工大の前身のひとつである東京高等農林学校出身で、当時名古屋大学の助教授だった伊藤嘉昭さん（イトウカショウとよんでいた）が確か集中講義をされた。著名な先生の講義とあって期待大の学生も多かっただろう。が、当時私は「社会生物学」が嫌いで、その日本での紹介者である伊藤さんも大嫌いだった。そのため講義内容にいちいち（心の中で）反発していたのだろう。B評価だっただけマシだったかもしれない。

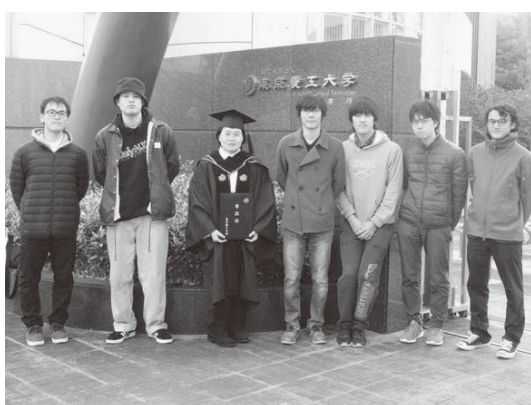
ハワイ大学の院生時代のある日、カネシロ教授と一緒に伊藤さんがエレベーターに乗ってこられた。「Dr. Itoだ」とカネシロ教授に紹介されたので「知っています。授業を取ったことがあります」と返答すると、伊藤さんは驚いて「Where?」と聞かれた。「農工大」と答えると「Oh!」と伊藤さん。二人はエレベーターを降りていかれた。伊藤さんが亡くなった後になって、自伝である『一生態学徒の農学遍歴』や『楽しき挑戦－型破り生態学50年』を読んで、自分が大変な失敗をしていたことに気づいた。学会やハワイで何度となくお話を聞くことができる機会があったにもかかわらず、それを自ら潰してしまった。今だったらなんとかし

てでも教えを乞うていただろう。

晩年伊藤さんは得意な生物のグループを持たなかったことを悔やんで、若手に得意なグループを持つことを奨励する文を何度か書いている。私は、これを貰ってきたので研究を続けてこられたと思う。

9. キャリアパス:将来の職業を選ぶとき、三つの判断基準が満たせるか？

小川 史恵（機シス博 H31）



「私は自分の職業を選ぶとき、三つの判断基準を設けました。第一の基準は、学べることが多い仕事をすることでした。その仕事をするすることで、長期的に自分を成長させることができるのか、ということです。第二の基準は、仕事以外の優先事項にも取り組めることでした。知的な活動や充実したプライベート、自由な暮らしを続けられるのか、ということです。そして第三の基準は、自分が幸福になれる仕事をすることでした。不満を抱えながら、いい仕事をすることはできないと考えています」(エマニュエル・マクロン：COURRIE JAPAN より (1))。

今から6年半前、現在 JARI 所長の永井先生から学会会場で「社会人博士に進んでみない？」というお話をされました。当時私はサービスエンジニアとして不具合が起きた時の信号を頼りに検知するシステムや車載コンピュータの書き換えツールを開発していました。しかし仕事への情熱を失いつつあることも感じていました。不満を抱えながら、いい仕事はできない事を実感していました。

博士課程では「自分でストーリーを作る」。そして「自分でそのストーリーを解決する方法、検証、答えまでたどり着く」。慣れるまで苦しみました。しかし一番辛かったのは博士号を取得しても前職で

プラスとはならない点でした。当時は相当疲弊し、①研究を継続したいなら会社を辞める、②学業を辞める、③転職して研究を仕事として続けられる環境へ移る、の3択を考え始めました。①はちょっと収入の面で大変そうです。②は簡単そうですが、メンタル面で社会人には難しそうな気がしました。研究の傍ら、広島に拠点を持つ会社の上司からいただいた提示は③でした。職場の上司と研究に対する議論や進め方を含めて、研究という面白さに次第にのめりこんでいきました。博士号取得のターニングポイントが見えてきたころ、仕事として研究を続けたい思いが湧き上がってきたことは、全く予想していませんでした。

もし会社でキャリアパスがうまくいかなくて悩んでいる方がおられたら大学に解を求めることで、なにか解決策が見つかるかもしれません。MOT（技術経営）修士や博士を調べてみてテーマが固まり次第、研究室の扉をたたいてみることを勧めます。チャレンジすることを農工大の先生は応援してくれます。指導教官の和田先生や応援してくれた全ての家族・先生・学生仲間にお礼を申し上げペンを置きたいと思います。 引用文献 <https://courrier.jp/>

10. 青色を薔薇色に

坂口 公敏（生命博 R2）

東京農工大学同窓会誌「農工通信」100号発刊を迎えるにあたり、心からお慶び申し上げます。私は山梨県にある三好アグリテック株式会社（イチゴ、ワサビ、サツマイモの品種開発、苗の販売）営業部に属しています。社会人ドクターとして小関・山田研究室の小関先生のもと、転職



デルフィニウムの花

する前に所属していた株式会社ミヨシでデルフィニウムの品種開発をしていたことがご縁で、デルフィニウムの新規花色をもつ品種を育成する研究をさせていただき、令和2年3月に卒業しました。

皆さんにとっては、花の御三家キク、カーネーション、バラとは異なり、デルフィニウムは馴染

みのない花ではないでしょうか。しかしデルフィニウムは空色の青、海色の青とさまざまな青色をもつ一重、八重咲きの花（アジサイと同じ、がく片に色づいている）を持つのが特徴で、私はここに魅了されました。デルフィニウムという名前から勘づく人もいるかもしれませんが、蕾がイルカの形に似ていることからギリシア語のイルカ（delphini）に由来します。蕾の形から日本語では飛燕草（ツバメ）、中国語では翠雀草（カワセミ）、英語ではLarkspur（ヒバリの蹴爪）と世界中で鳥にちなんだ名前と呼ばれています。さらに私の所属していた研究室のテーマである花色素のデルフィニジンはデルフィニウムが由来です。

ところで、デルフィニウムは、デルフィニジンもしくは青色遺伝子のF3'5'H遺伝子を欠失してペラルゴニジン（桃色）を有するものは存在しますが、シアニジン（薔薇色）をもつものは存在しません。デルフィニウムの青に魅了され、小関先生の門を叩いたはずが、薔薇色のデルフィニウムがないことに気づいてしまい、それを育成するのが目的となりました。「人の目」や「経験則」のみ利用してきた慣行法の私の開発手法に、小関先生の花色分析や遺伝子発現を手段として使う「科学の目」に合わせて利用することで、効率的に「薔薇色」のデルフィニウムを育成することができました。

新型コロナウイルス感染症の影響で卒業式が中止され、博士課程の卒業生に会えなかったのは非常に残念でした。卒業生には20代～60代までの方がいると聞きます（ちなみに私は50歳）。私は園芸学系の会社に勤務しておりますが、工学府で勉強させていただきました。このような異を拒まない多様性を受け入れる寛大さが素地としてあり、農工大の強みと感じています。今後も発展していくことを祈念しております。



【Ⅳ】ふるさとへ 是非お越しを！

1. 岡山へこられえ

山田 尚公 (林産 S55)

東京から遠く600km余り離れた岡山県ですが同窓会支部はこぢんまりとして毎年の総会も20余人の参加で続いています。農工通信を見て学友諸兄の人生に共感を覚える事も多いのですが、岡山支部ではさらに何となく農工大らしい出会いがあります。我が家には家族3人分の大学同窓会誌が届きます。それぞれ個性的で、私学伝統校は著名な卒業生など華やかなイメージがあり、公立名門大は社会に張ったその根の深さを思わせます。農工大の個性とは何だろうかとあらためて考えてみました。



近年、岡山は災害が少ないという利点を生かして都市部からの移住者を募っています。しかし、地域おこし協力隊のその後の定住もなかなかうまくいかなかったり、夢と現実のギャップに苦しんだ人もあったようです。それでも移住者は増え続け、より現実的に仕事や住宅を見つけて地域に根をおろす若い世代も見かけるようになってきました。

岡山支部の集まりにも県外出身者は多く、若い時に就職で来岡した人、リタイア後の終の棲家を岡山に求めた人、心機一転で岡山で起業した人など多彩です。

しかし、そこに「移住者」と言う頼りなさのようなものを感じさせないのが農工大流なのだろうと思います。起業は事業が軌道に乗るまでにはたいへんな苦労があり、傍から見ると大丈夫なのか不安に感じる事も多いのですが、我が同窓にはそれを微塵も感じさせない立派な方がおられます。社会構造の新しい変化の中で、東京への一極集中と同時に多くの移住が進められます。そこで求められる人格こそ農工大気質のようなものではないでしょうか。

岡山支部の大先輩は公務員の技術者だったそうで

ですが、全国どこへ行っても現場で役に立つ仕事をしている農工大卒業生がいたと仰います。デスクワークだけでなくゴム長靴を履き、その両方をこなすのが私達共通の能力です。

田舎の生活は覚悟しなければならない部分もありますが、それを補って余りある豊かな自然環境が農村の魅力です。もしも田舎へ移住したいと望まれる方があれば、岡山もその候補にお考え下さい。岡山の魅力は語りつくせませんが、首都機能の一部を岡山へ移転という考えもあり大きな可能性を持っている地域には違いありません。

2. 至福のひととき—オオシマザクラとの縁^{えにし}

相澤 孝夫 (林学院 S58)

林学科造林学研究室の恩師、相場芳憲名誉教授(林学S34)には、32年の時を経て再会してから5年目になります。

宮城県庁に就職して20年後、特別名勝松島に分布するオオシマザクラの謎を解く必要性に駆られ、開花時期の分布確認のために宮戸島へ12年間通いました。造林学研究室の先輩、小宮忠義さんにも数年同行頂きました。

平成27年、相場先生の叙勲祝賀会に出席できなかったのですが、サクラを愛する先生に奥松島の移ろいゆく景観をご覧いただこうと思いました。

4月末、宮戸島は、色とりどりのサクラが咲き誇る素晴らしい情景を呈します。相場先生に連絡すると、「行くよ!」と二つ返事でした。

オオシマザクラは、自生地伊豆諸島、伊豆半島から遠く離れた宮戸島で、天然更新している個体を36年前にみつけ、その後、雑種らしい個体が増えていることを確認しました。36年前はマツの巨木ばかりが生い茂る島でしたが、今では松くい虫被害で激減したマツにサクラ類が置き換わりつつあります。

平成28年春、相場先生に天然記念物シオガマザクラや宮戸島のオオシマザクラをご覧いただきました。

その後毎年、サクラの開花時期に宮戸島、福浦島等を継続調査され、仙台での研究室同窓会にも参加いただきました。

さて、平成31年3月に研究室仲間、静岡県近藤晃氏と23年ぶりに台湾を訪れました。目的は、台湾省林業試験所で活躍する同期の陳財輝氏と旧交を温め、台湾中部の森林や関連施設の視察でした。もちろん相場先生ご依頼のサクラ観察も携えた旅でした。

主目的の阿里山では、たまたまサクラ祭り開催中で、森林遊楽区は大勢の観光客で賑わっていました。阿里山には日本統治時代に日本のサクラやスギが多数植えられています。オオシマザクラの形態観察を行い、帰国前夜、農工大学大先輩、もうじき米寿の范耀徳氏ご夫妻とも旧交を温めることができました。

今年は残念ながら新型コロナウイルス感染症の関係で、オオシマザクラの形態調査は私一人で行いました。

福浦島に架かる252メートルの朱塗りの橋は、2011年東日本大震災の津波で橋脚が破壊されたものの台湾の景勝地「日月潭」の観光船業者の義援金で修復されました。オオシマザクラを巡る縁を感じます。皆さんもパンデミックが解消された折には奥松島のマツと色とりどりのサクラを是非ご堪能ください。



3. 山形で我儘気儘にラリーを楽しむ 自動車部OBより

熊坂 敏彦 (生機 S58)

農工大自動車部は1962年に「自動車を通じて機械に親しみ団体活動に依る人格の陶冶を計る」ことを目的に創設されたとのことですが、まだ自動車そのものが高嶺の花であった時代から、若者の車離れが進み、さらには限定的にせよ自動運転が導入間近な現在に至るまで、自動車への想いは世代によっても大きく変化していることでしょう。

1959年生まれの私にとって自動車（特にスポーツ

カー）は少年時代からの憧れであり、高校時代のラリーというモータースポーツは自動車雑誌などを通じて海外を最も身近に感じさせる情報源でもありました。自動車部創設当初からの活動を牽引された樋口健治教授は自動車関連の著書も多く有名でしたので、農工大自動車部には大きな期待を持って入部した次第です。（自動車部の歴史や活動を語るには荷が重いので、他のOBの方にお問い合わせしたいと思います。）自動車部OBには自動車会社や関連業界に就職された方も多いのですが、私は生まれ育った山形県で直接的には車と無関係な就職と趣味としての車との係わりを選択しました。3年ほど前に33年余り勤めた外資系企業を早期退職し、現在は地元中小企業で小水力発電の事業化に取り組んでいます。

転職を機に同窓会（山形県支部会・懇親会）にも毎回参加させていただくようになり、OBの方々と学生時代や地元の話で盛り上がるにつけ、農工大と山形県への愛着が一層深くなっているこの頃です。4人部屋の寮生活でアルバイトに精を出し、部活（自動車部と卓球部）のついでに学業のような学生時代でしたが、今考えれば農工大での5年間は自分の人格形成の過程で最も重要な段階だったと思えます。

ラリー競技の方は農工大自動車部時代から参加し始め40年ほどになりますが、昨シーズンは久しぶりの東北シリーズ戦チャンピオンと東日本シリーズ3位入賞を果たすことができました。競技人口も減少しており、かつてのような盛り上がりは望むべくもありませんが、ラリー競技を生涯拘りの趣味としてできる限り現役で続けて行きたいと思っています。

山形県は、全国で唯一すべての市町村に温泉が湧出し、米沢牛や蕎麦、冷たいラーメン、さくらんぼやラフランスを始め多様な果物など、皆さんにお勧めしたいものがたくさんありますので、ぜひお越しください。なかでも、私の故郷さくらんぼの里 寒河江市が自分の中ではイチオシです。





【V】ひとこと言わせて

1. 誠意が却って仇(あだ)をなす経験 タイ焼きに教わったコミュニケーションのポイント

高野 文夫 (化工院 S53)

過去にこんな経験をしました。この経験は、深刻にコミュニケーションについて考えるきっかけになりました。



2月の寒い日でした。新年会を新橋でやり、二次会を終えると12時を超えていました。地下鉄東西線の終電で降りたった某駅の傍にタイ焼き屋が店を開けていました。

私がトイレを使い一足遅れて改札を出ると、大酒に酔った友人がタイ焼き屋の親父と怒鳴り合いをしているのです。

友人が“タイ焼きを一つくれ!”と言ったら、“3分間待てないのかよ!”とつっけんどんに言われたらしい。“この野郎!なんだその言い草は、こっちはお客だぞ!”と酒に酔った勢いで友人は怒鳴ってしまったらしい。彼は柔道家で腕っぷしには自信がある。

ところがです!露天商のその親父さんは悪気があってその様に言ったのではないのです。言い方が悪かったのです。焼いて並べてあるタイ焼きは冷えている、それを食べさせるのは可哀そうだ、暖かいのを焼いてあげるから3分待ってくれないか?

本当は温かい気持ちで言ったのだった。ところが、友人はその様には受け取らず、“待ってやがれバカヤロウ!”と受けとってしまったのです。

このような意味の取り違いはよくあります。間違いなく言える事は、コミュニケーションでは受け手が主役だという事です。

どのように受け取られたかが問題なのです。ぶっきらぼうでは通らないのです。たとえ心の中では、「この馬鹿やろう」と思っている、口に出

す言葉が「あなたはいいやつだ、好きだよ!」って言えば、大概相手は喜ぶのです。

心に偽りがなければいいんだ!と主張する人がたまにいますが、私はコミュニケーションの怖さを知らない甘い考えだと思います。

コミュニケーションでは、こちらがいくら誠心誠意に対応していても、その誠意が相手に伝わらなければ何にもならないのです。

2. 骨髄移植

尾中 直道 (環・資 H7)

骨髄バンクから定期的に届く広報紙の入った封書と違う。妙な緊張感を感じながら開封すると「提供候補者の通知」であった。私が骨髄バンクに登録するきっかけは、10年前の献血時にお願ひされたことだ。この時、中学生時代、白血病を発病した先輩が亡くなったことを思い出した。当時は、骨髄バンクはなく、移植可能な人が見つければ助かった可能性はあった。骨髄バンクに登録する機会になったが、本当に提供する機会はない気もしていた。

骨髄移植までの流れは、「通知→確認検査→最終同意→採取前健康診断→骨髄採取」である。検査時等には、骨髄バンクのコーディネーターの方がすべての世話をしてくれるので、面倒なことは一切ない。ドナー候補者は通常、3~5人程度が選定されるが、特殊な白血球の型の場合、1人しか見つからないこともある。HLAの適合率は、兄弟姉妹で4人に1人(25%)、血縁関係がない場合は、数百人から数万人に1人といわれている。ドナー決定には、提供の意思はもちろん、健康状態、体重(採取可能量を決定する重要項目)などを考慮して決まっていく。

私は、最終同意前に医師に質問をした。ひとつが手術中に死に至る危険性があるか、もうひとつが骨髄を採取する時に激痛を伴うのか。多少の命の危険があっても提供するつもりではあったが、骨髄

移植に関する「うわさ」の真偽は確認したかった。

1つ目の「死の危険性」だが、日本では死亡事故は1件も発生しておらず、海外で数例あるが、医療事故ではなくドナーの持病が起因している可能性が高い。2つ目の「激痛」についてだが、全身麻酔をするので痛みを感じることはない。しかし、患者は、治療中に麻酔なしで骨髄液を採取されることがあり、この時に激痛を伴う。これを「魂を抜かれる痛み」と医師が表現していた。この話しなどから骨髄移植＝ドナーが激痛を伴うと誤解されているようだ。

骨髄採取による入院前、気を付けなければならないのは、体調管理と交通事故などのトラブルだ。患者は、無菌室などで他人の骨髄液を受け入れられる身体となる準備をするため、提供されないこと

があれば死に直結する。骨髄提供の意思表示後のキャンセルは許されないし、提供できない事態を避ける生活が求められる。私は、特段のトラブルもなく採取をむかえ、実際の骨髄採取は、前泊、採取、経過観察など予定どおり4日間で終わった。骨髄採取後、痛みもなく、傷跡も残らなかった。きれいな個室で過ごさせてもらい、リフレッシュできたくらいだ。

後日、患者さんから提供に対するお礼の手紙を頂き、人生において初めて人の役に立てることがあったと感じた。提供側にとってドナーになることは高いハードルではないが、患者からすればドナーは生きるために絶対必要な人。皆さん、まずは登録してみませんか。

コラム<キャンパス最前線> 2

コロナ禍での遠隔講義

同窓会前理事長 滝山 博志 (化工 S62)

本来であれば春のキャンパスは、新たな生活を期待した新入生であふれているところですが、今年度は例年とは全く異なる風景でした。遠隔講義となったからです。大学ではGoogleが提供するGoogle Classroomを使い、先生方が工夫をしながら遠隔で講義を行う形式をとりました。遠隔での講義にはいくつか形式がありますが、学生のネットワーク環境などにも配慮し、しかも遠隔講義として認められる「オンデマンド型」とし、授業時間内又は授業終了後にメール等により学生から質問等を受け付ける方式をとりました。この方式であれば、本来の講義時間内に双方向性を維持することが可能です。私も液晶タブレットを用い、授業内容が単調なスライド説明にならないよう、スタイラスペンで内容を書き加えながら遠隔講義を行いました。今までの対面であれば、学生の反応を見ながら講義の進捗を加減出来ましたが、今年は各講義の終了間近にアンケートを行い、そのアンケート結果をもとに次の講義内容のスピードを決める必要がありました。担当講義の最終評価をみると、結果としては、例年よりも学生の理解度が高くなっている気がしています。アンケートの一部をここで紹介します。この方式の講義に対しての印象を5点満点で聞くと98名の学生から回答があり、5点（非常に満足）95.9%、4点（満足）4.1%で、意外にも学生には満足度が高いことが分かりました。その理由を聞くと、「ノートで板書する時、動画を止めればよいので、板書する時間が十分にとることができるため。」「1回目では理解できなかった箇所を、もう一度視聴することで理解することが出来るから。」ということでした。学生は理解を深めるために、不明な箇所について動画を見返しながら、しかもノートを取りながら学習していることがわかり、これによって理解度が高まったという理由がわかりました。さらに、「普段の教室での講義では、黒板が見やすい、先生の声が聞こえやすい前方の席に座れる人は限られるが、オンライン講義なら、等しく授業に集中出来る。」とか、「オンライン講義の方が、目の前で直接語り掛けているかのように、講義を受講することができるから。」など、講義を平等に受講したいという学生も少なからず存在していることが分かりました。講義に関しては、この様に工夫をすれば、遠隔講義でもなんとか今までの学習効果を維持できそうなことが経験的に分かってきています。しかし、理系であると、実験でデザイン能力も養う必要があり、コロナ禍での実験教育をどう考えるのかが今の課題となっています。

活

【VI】楽しく元気に！

1. 団塊の世代 万歳 そして更に楽しく 生きるために

河村 良一（機械院 S48）



仲間と金勝山登山／右端が河村

農工大学を卒業し、会社勤めの後、退職した後、趣味の世界で知識を深めようと地域の老人大学に入学した。園芸学科に入りひとクラス25人で植物園に出かけ樹木の名前を学び剪定作業を覚え時に野菜作りも行う。

これは良いなと感じたのは何といってもしがらみのない仲間意識。農工大学に入学した際もどこの出身か、どういう高校生活だったとかは全く知らない状態で友達を作り親友も出来た。

老人大学も同じで、どの会社に勤めていたかどういいう仕事をしてきたかは全く知らなく（知る必要もない）、人としての付き合いで新しい友と出会った。こういう友達、仲間は良いなとつくづく感じている。

老人大学を卒業して3年になるが、今でも毎月同じクラスの仲間と会い、語り、飲み、スポーツを楽しんでいる。皆さんの中でお住いの近くに老人大学があれば是非、入学をお勧めしたい。ちなみに私は現在滋賀県に住んでいますが、滋賀はレイカディア大学（琵琶湖のレイクと理想郷のアルカディアが由来です）です。

2年間の学生生活を共通の趣味の元、明るく楽しく過ごします。中には未だ働いている方もおられます。第二の人生で素晴らしき友が出来ることを保証します。私も新しい友を得てこれからの人生もう少し楽しく生きていこうと考えています。

2. おいでよ！同窓会！ やろうよ！リモート呑み会！

渡邊 快記（生シ博 H19）



大阪府支部 理事会

私は、数年前に大阪に引っ越してきました。知らない街で、様々な不安を抱える中、同窓会の案内が来たので、「知り合いも少ないし、行ってみよう。」と参加することにしました。皆さま、初対面にもかかわらず、温かく迎え入れてくださいました。東京から縁もゆかりもない大阪に来たのに、縁もゆかりもあったのです！

50歳近い私が今でも若手なので（笑）、多くの大先輩に会えます。学科名も変更しすぎて、何がなんだか全然わかりません。なのに、みんな確かに「あの場所＝農工大」で学んだのです。お酒の飲み方とかも。会うとわかります。空気で分かります。

大阪にいるのに、会場は標準語っぽい。会場の入り口をくぐると、時空を超えて農工大になります。まさに「どこでもドア」です。また、思いがけない共通の先輩もしくは後輩がいて、話が盛り上がります。すごく心強かったです。今では理事もやっています。

転勤などの様々な理由でどこか知らない街に引っ越したとしても、おそらく農工大の同窓会支部はあります。あるはずですよ。「どこでもドア」をたたいてみませんか。と、原稿を進めていましたが、世の中が大変なことになってしまいました。オリンピックもなくなってしまいました。

時差出勤、テレワーク、自粛…。生活のリズム

が一気に変わりました。あんなに家呑みが続いた事はありません。

当然、私もリモート呑み会にチャレンジしました。苦手な人もいるようですが、終了時間を決めるなどすれば、そんなに気になりません。こちらは日本各地の友人と開催しましたが、結局、ほぼ大学時代の友人でした。呑み会には貪欲（笑）。

その時だけ時間を合わせればいい。移動も交通費もいりません。このリモート呑み会のおかげで改めて距離が近くなった友人もいます。自宅という空間で過ごすなら、やはりオフモードで会え

る友人が私にとってはよかったです。

対面の同窓会とリモート呑み会。今ではどちらも大切な人生のツールです。なかなか会えそうもない友人とは、リモートで。

住んでいる地域では、大先輩とソーシャルディスタンスを保ち、マイクを使ってでも、同窓会で同じ空間を共にしたいです。

まだまだ、慣れない生活が続きます。今後、生活スタイルそのものが変わっていくことと思います。でも、楽しく、懐かしく、温かく呑みたいですね。

コラム<キャンパス最前線> 3

「農工通信『百号』の節目に 新型コロナウイルスを究める 農工大学の取組に出会って」

古賀 淳士（農学院 S54）

農工通信が産声を上げた頃、私は郷土の大先輩・下村脩博士が卒業された小学校の講堂で、仲間と共に東京五輪のテレビ放映を観戦した思い出があります。

それから50余年が過ぎ、農工通信『百号』に合わせるように、誘致された2回目の東京五輪に世界の皆様をお迎えする予定でしたが、中国・武漢市で発生した『新型コロナウイルス感染症』が世界中に拡散しました。

その結果、東京五輪の開催延期に加え、国内でも著名人の感染死・全国的な学校休校・経済の低迷など、人々の命と生活を脅かす事態が発生しました。

そんな中、テレビ番組で「新型コロナウイルス研究者 東京農工大学 水谷哲也先生」を拝見し、ネット検索で新刊書『新型コロナウイルス・脅威を制する正しい知識』（R2.5月／東京化学同人刊）の存在を知り、地元図書館で照会・借入して拝読しました。

本書は、市民講座で講義するように判り易く執筆されており、コラムや自作イラストも工夫されています。タイトルについても、＝「正しく怖がる」事の大切さ、つまり「正しい知識をもとに、怖がる場面か否かを理解して正しく行動し、自分も他人も感染しないようにする」ための本＝、と説明されています。

この感染症（以下、「新型コロナ」）を私的に読後要約すると次のようになります。

- 1) 新型コロナは、2002（H14）年に中国で発生したSARS＝サーズ＝（重症急性呼吸器症候群）の仲間、コウモリが感染源（自然宿主）。
- 2) 感染方式は、ウイルスを含む飛沫による感染。防疫対策は、①環境要因（3密）回避。②「マスク着用＋手洗い実行」③免疫力向上＝生活改善・ストレス回避＝。
- 3) 検査法では、韓国で始まったドライブスルー検査。更に新しい迅速検査法に関して、農工大の共同開発・全自動リアルタイムPCR検査や三菱長崎造船所クルーズ船修理中の外国船員検査で成果を見せた長崎大学の共同開発・LANP法、等を紹介。
- 4) 治療薬は、既存の薬剤を試すことが得策で、アビガン（富士化学）は中国科学技術省が有効性を認め、レムデシビル（米国製）でも同様な効果が示されている。
- 5) 終息と再発防止へ向けた最重要課題は、医療体制の維持確保。
- 6) 終息条件は、最終患者陰性確認後に「28日間」新規患者の発生が無い場合。

以上ですが、ワクチンの話もありますので、興味のある方は本書をご覧ください。

この『百号』が届く頃には、新型コロナも終息して、「今は昔」の出来事であって欲しいと思いつつ、母校での更なる研究推進を期待しております。

また、次の会誌101号が届く今年8月には、母校と縁の深い長崎平和祈念像（※）の前で、従来通りの式典が行われる事を願っております。

注（※）製作者 北村 西望 氏の兄上 北村 繁夫氏が蚕業実科、M32卒業。



東京農工大学科学博物館から

齊藤 有里加（東京農工大学科学博物館 特任助教学芸員）

東京農工大学科学博物館は明治19年の蚕業講習所付属施設を創基とし、母体となる東京農工大学は農学部・工学部ともに多くの蚕糸技術者を輩出してきました。

常設展示における蚕織錦絵コレクション、自動繰糸機HR-2の動態実演は視察や海外からの問い合わせも多く、繊維関連の資料においては国内有数です。建物は工学部の旧本館であり、懐かしいと立ち寄られる卒業生の方もいらっしゃいます。また、農学部にも博物館分館が設けられ、農学部本館2階に展示室が設けられています。

このように当館は大学創立期からの資料を多く所蔵していますが、全てをお見せできないため、現在学術資料のデジタル化に着手しています。そのような中、大きなトピックスとなったのは、2019年2月の本学初クラウドファンディングへの挑戦です。きっかけは明治6年に富岡製糸場の次にできた官営の近代製糸工場、勸工寮葵町製糸場の図面の再発見でした。産業技術史上貴重な図面でしたが、図面は分割されているため製糸場の全貌は不明であり、図面を基にしたデジタル3D化の必要がありました。クラウドファンディングによる支援を呼びかけさせて頂いたところ、直後より、卒業生の皆様をはじめ多くの励ましのお言葉とご支援をいただきました。おかげさまでわずか9日間のうちに当初の目標金額を達成することができました。支援をもとに2019年4月からは学生と有識者を交えたプロジェクトが始動し、繰糸器と建物外観を3D画像で復元することに成功しました。

さらに2020年3月には3Dプリンタを活用した復元模型も完成し、イタリア式と呼ばれる近代製糸様式の可視化は大きな学術成果となりました。

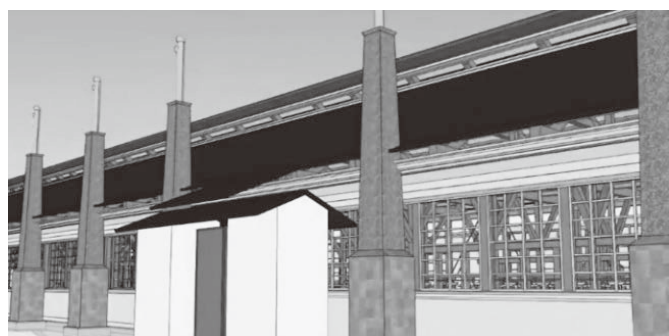
また、このプロジェクトのもう一つの成果は、クラウドファンディング支援を通じた世代間の心の交流が行われたことです。図面復元プロジェクトは、現役学生たちが粘り強く挑戦していましたが、図面を読む地道な作業は先が見えず、つらかったと思います。中間報告会の際には、遠方からクラウドファンディングに支援頂いた方々が駆けつけてくださり、学生に声をかけてくださいました。製糸学科の卒業生が当時の様子を語るなど、博物館がまさに新旧の交差点となっていることを実感いたしました。

本来ならば、春に模型と3D映像を交え皆さんにお披露目をし、ご報告する予定でした。しかし、現在コロナ禍の影響で臨時閉館が続いています。現在の成果をもとに、デジタル企画展での公開を目指しています。また、閉館中もSNSを使ったこれまでのデジタル資料の発信のほか、博物館360°ビューの公開を行い、博物館の中が見られるようになりました。今回表紙に掲載いただいた錦絵も高精細のデジタル公開を準備中です。新しい生活様式を取り入れる時代においても、社会と人々と繋がる博物館として機能していきたいと考えています。

100年以上の歴史を持つ博物館は国内でも希少です。博物館再開に向けて尽力してまいりますので、今後ご支援いただきますようよろしくお願いいたします。



デジタル3D化プロジェクトキックオフミーティング



勸工寮葵町製糸場デジタル画像

編集者の思い

農工通信の寄稿依頼に寄せて

農工通信 元編集委員
東京農工大学名誉教授 横山 正 (農学院 S55)

農工大農学部を2019年の3月に退職しました横山です。農工通信編集委員の深水さんよりご連絡を頂き、2003年ごろ竹山先生（現在早稲田大学教授）と編集委員をやっており短文を寄稿することになりました。ずっと昔のことですっかり忘れておりましたが、当時の農工通信を眺めて、時代の変化を感じました。

2003年ごろの研究はCOEとかが出始めて、先端研究拠点化が始まりました。それ以降急速に研究競争が激化し、大学間での序列化等も露骨にされはじめ、日本自体もお金が無くなってきたので、当然大学に来るお金も少なくなり、どのように大学の運営資金を獲得するかで、農工大農学部ものどかさが少しずつ消えていく時代になってきました。現在はムーンショット等の将来を見据えた研究が立ち上がり、研究規模が拡大しています。新学長の千葉先生がそのコーディネーターを務められています。農工大の総合研究が一段と進化することを願っています。若かったら、私もその研究に参画したい、若い人がうらやましいと感じています。

編集委員を終わった後に東日本大震災が発生し、原子力事故が生じました。編集委員を退任した私にとって最も大きな出来事でした。農学部6号館は、当時は改修前で、揺れが大きく崩壊するのではと思いました。原子力事故の結果、福島県を中心に放射性セシウムによる農耕地や山林の大規模な汚染が生じました。農工大農学部の支援を受けて、文部科学省の特別経費「福島農業復興支援バイオ肥料プロジェクト」を獲得し、多くの教員や学生さんと福島県二本松市東和地区を中心に、放射性セシウムのモニタリングや植物-微生物相互作用による農耕地からの除染技術開発、可食部に放射性セシウムを蓄積しない作物の育種、風評被害からどのように立ち上がるか等の研究を2012年

から5年間行いました。現在も関連の研究を続けております。その間に農家さんの友達が沢山できて、退職後二本松市へ移住しました。また、農工大は日本のブルーベリーの発祥の地ですので、ブルーベリーの先生が沢山おられます。その先生方のご指導で、現在、東和にブルーベリー園の構築を行っています。3年くらい先にブルーベリー園を開園するつもりで、時間があるときはブルーベリーの世話をしています。せっかく農園を開くなら農家になろうと思って、親しい農家さんたちに相談し、その御協力で、二本松市農業委員会に農家の申請を行い、2020年3月に申請が認められました。私自身の専門は土壌肥料と農業微生物学で、退職前15年くらいで、イネ用のバイオ肥料の研究を学生さんたちと行い、卒業生が応援してくれて「ゆめバイオ」というバチルス微生物資材に昇華させてくれました。2021年度から水稲用の微生物資材として北海道や本州を中心に本格的な販売になるようです。ところで、樹木への微生物接種で生育促進等に関する研究は菌根菌が中心で、バチルス菌の接種でどのような結果が出るかは全く不明です。それをブルーベリーに施用して効果を調べたいと考えています。園の名前は「東和ブルーベリー研究農園」にしたいのですが、研究の場所として同窓生に利用いただけると嬉しいです。

2019年に中国湖北省武漢市付近で発生が初めて確認され、それが新型コロナウイルス感染症(COVID-19)として世界的な流行を引き起こしています。エボラウイルスは、たびたびアフリカで流行しましたが、パンデミックにはなっていません。それで、私もそのうち収まるかなと期待していましたが、2020年8月11日現在で世界の感染者数は2000万人を超え、死者数が73万人を超えました。私たち退職者は65歳を超えた高齢者で、代謝基礎疾患も有しており、感染が本当に怖いと感じています。社会的にも経済活動の強度と感染の広がりやシンクロし、将来どのような社会になるのか不安を感じます。私は、この社会的な雰囲気は2011年の東日本大震災後の社会状況と類似性を感じ

じます。当時と違うのは、大学の講義がリモートになり、研究活動も制限され、さらに一緒にお酒も飲めない状況となり、学生さんたちの共同の活動が抑制されていることです。現在の東京の感染状況等を見ていると、11月の農工祭の開催も心配です。教員や学生さんたちは、今後どのように立ち上がっていくのか、同窓生に聞かせていただくと、同窓生も支援に関してアイデアが出てきて具体的な行動もできると思われます。同窓会は、喫緊は学生さんの就学経費の支援で良いと思いますが、コロナの時代はしばらく続きますので、是非、同窓生や教員・学生が参加できるオンライン会議やそのHPでの紹介等により何ができるかを明らかにし、同窓生による農工大の学生や教員の活動を支援する輪を広げる取り組みをしていただければと思います。

ロダンの言葉

農工通信 元編集委員
同窓会副理事長 桑原 利彦 (生機 S57)

つい先日、私のweb講義を聴講している学生(S君)の希望で面談をしました。最初はS君の近況を聞くなどして和やかな雰囲気だったのですが、だんだん人生論のような、少し込み入った話になってきました。S君曰く、なんとなく機械工学に興味があって農工大に入学したが、これといって興味が湧くような講義がなく、自分が何をやりたいのかもわからなくなってきたとのこと。私は、自分もS君の年齢のときは人生の先が全く見えていなかったし、これといって心底やりたいことがあったわけでもないが、講義や卒業研究を通じて、少しずつ自分が何を面白いと思えるのかがわかってきた。だからいまは辛抱の時期だと思って、自分の興味の範囲を広げるよう心がけたらどうか、というような経験談を話しました。特に博士後期課程で本格的な研究生活に入ったとき、自分が書いた(指導教授の加筆でほとんど原形はとどめていなかったけれども)最初の論文が学会誌に掲載されたときの達成感は例えようもなかったことなども話しました。

とは言え、博士号を取得してからも一人前の研究者と言えるような研究成果を上げることができず、30代は苦しい時期を過ごしていました。そし

て忘れもしない1998年の秋、短期派遣留学でパリに滞在していたときのことで。暗く寒い日曜日の午後、何気なく立ち寄ったロダン美術館の中庭で、突然バルザックの像と対面しました。バルザックはマントに身をくるみ、絶対的な孤独の中で虚空を見上げ、世界と対峙しているようでした。そして私は、その威厳に満ちて屹立する姿に、かくあるべしと心震えたのでした。帰国後ロダンのことをもっと知りたくなり調べていくうちに、ロダンの言葉に出会い、私は救われました。

「...人は仕事をする時にはいつでも迷うものです。決して自分がどこを歩いているか確かにわかるものじゃありません。進歩は実に遅く、実に不確かなものです。やがて、だしぬけに、それが啓かれます。人は前に出ます。けれども暗中模索の幾年かの後のことです。ただ、疾く行きつこうと思ったり、自分を虐待すると、自殺することになります！石に一滴一滴と食い込む水の遅い静かな力を持たねばなりません。そして到着点を人間の忍耐力にとって余り遠すぎると考えてはなりません。年取ってからでなければそこへ行けません。」(高村光太郎訳『ロダンの言葉抄』岩波文庫、15)

S君へ：社会に出たら、研究者・技術者として大いに邁進して下さい。

もし仕事に行き詰ったなら、ロダンの言葉が貴君を助けてくれると思います。

農工通信を振り返って

農工通信(後期号)編集委員
深水 智明(織工 S38)

農工通信は昭和39年(1964年)に第1号が発刊され、本号(2021年)で100号を迎え、その間57年を経ました。その内容、編集や発行形態等にも工夫が重ねられ、幾多の変遷がありました。同窓会誌である農工通信は同窓会の歴史でもあり、また、農工大の変遷も写しています。

農工通信の変遷(詳細は別紙、年表をご参照)において、内容では、大学情報(母校ニュース等)、同窓会情報(支部・クラス会だより等)、同窓生の寄稿等と順次広がり、編集や発行面では、発行回数増加(年1回から年2回)、紙面の大型化(B5からA4)等の変化がありました。また、2000年には同窓会のHPが開設され、農工通信が掲載

されて、皆さんの閲覧の機会が増えました。

近年での大きな変化は、年2回発行の中、1回(後期号)を同窓生からの寄稿集として、2013年1月から発行されたことです。農工通信では、これまで同窓会の活動状況や農工大の情報等の組織的な情報が中心でしたが、この後期号は同窓生個人の寄稿であり、同窓生間の交流、そして絆を育むことが期待されます。そして、それを受けて同窓会活動の活性化、大学への関心の高まりを望むところです。

ところで、農工通信の年表作成に当たり、農工通信のバックナンバーを調べていたところ、農工通信(66号/2000年12月)の巻頭言「21世紀を迎えるに当って、同窓会に期待するもの」(下田博之同窓会元理事長、農工大名誉教授)を見出し拝読しました。そこには、同窓会活動への同窓生のボランティア活動や大学支援に同窓会への期待等がアピールされています。

私事ですが、この2000年頃(約20年前)には、企業活動から少しは距離を置き、企業への責任も軽くなり自由度が増したので、同窓の皆様と共に農工大の産学連携事業のために若干のボランティア支援を始めた頃です。下田先生の思いに改めて絆を覚える次第です。同窓の皆様には社会での多くの価値あるご経験を広い分野で同窓会、大学へのサポートを戴ければ、幸いに思います。

農学部本館前の並木風景、 どう変わったのでしょうか？

農工通信(後期号)編集委員
大亀 哲郎(農工 S46)

それは、2020年7月15日『農工通信』100号の中間打ち合わせ会議の席上であった。編集委員が集まり、100号であるが故に記念号とも云うべき刊行について、その企画案を検討していた。「農工通信」1号は1964年発刊であった。ということは56年以上の歩みが積み重なっていることになる。

この会議の話題の中で、過去の写真を並べて100号の歴史を追う。ショットを選び取って載せることで、一目瞭然で同窓会の歩みをたどる。互いに同窓会への祝意を讃えあうことに写真集で益せないかという話が出た。ここで私は思い付いた。農学部本館時計台・講堂の前に広がるケヤキ並木、正門

前の風景の変貌を追ってみてはいかがだろうか？

この思いが頭に浮かんだ私は、帰宅後アルバムから時計台を望む写真を探し出した。時は、1968年3月、自分は1年生だったが、入学試験日に登校した際に撮った写真である。「第1試験場」という看板が立っているので、私の記憶が呼び覚まされた。

この並木道、今はどうか？樹齢としては撮影当時から52年経っている。そこで、私は近影を併せて紹介することにした。3月と8月で季節の違いがあつて申し訳ないが樹の高さはどう変わったのか？同窓会誌の歴史に目をやれば、4号刊行の頃から100号への変遷、移り変わりはどうか？

そして、会誌100号のご感想はいかがだろうか？編集委員は会誌作りの「縁の下の力持ち」役だが、自分の企画をページで実現できる近道にいることもお知らせしたく、編集者の思いを込めた写真紹介となった。



左 1968年3月

右 2020年8月

正門の傍らには「府中の名木百選」のプレート表示がある。1988年当時のケヤキ並木は、樹高18~25m、幹周1.3~2.0mであったことが分かる。

農工通信の編集に携わって

農工通信(後期号)編集委員
橋本 裕(林産 S47)

農工通信後期号の編集に携わってまだ3度目の新米編集者ですが、ここで一つのエポックとなる100号の編集に関わることができたのはありがたいことと感謝しています。

さて、農工通信年表を見てみますと、同窓会誌の発行形態もいろいろな試行を積み重ねて、平成24年度から現在のスタイルに落ち着きました。

年2回の発行ということでの一番大きなメリットは、後期号で個々人の近況や意見が直接紙面に載ることにより、会員の交流に大いに役立っていることだと思います。

私も皆さんの寄稿文に接し刺激を受けたり、勉強をさせてもらったりしている部分が甚だ多く、非常に新鮮な気持ちで編集作業をさせてもらっています。

これからも、多種多様な環境の中でいろいろ実践されている皆様の経験や知識を、読者も知ることができるよう幅広い方々の寄稿をお待ちしています。

さて、将来の農工通信も、新型コロナの大流行を契機に、世の中のシステムがどんどん変わっていく中で、ペーパーレスになり、デジタル化やズーム等を使った相互交流型の同窓会誌に変化していくだろうと想像しています。

そうなれば、地域や時間に関係ない交流ができますので、若い卒業生の皆さんがもっと同窓会に親しみを感じてくれるかなと期待をしています。

今後とも同窓会の発展を応援して下さるようお願いいたします。

編集所感

農工通信（後期号）編集委員
金子 由実（織高院 S53）

今回、農工通信100号を無事発行することが出来ました。これもひとえに同窓の皆様のご協力の賜物と感謝申し上げます。農工通信は2012年度より年2回（前期号、後期号）の発行となりました。私は編集者として、同窓生の寄稿集となる後期号

を第1回目（84号）から担当しています。毎号、「今回ははたして原稿が集まるのか？」という不安な気持ちから編集をスタートしていますが、各同窓会支部等のご協力もあり、日本全国から多くの原稿をいただいております。寄稿していただく同窓生の多くは年配の方々です。中には、戦後の専門学校時代を過ごした同窓生や新制大学となってもない頃に卒業した同窓生等の大先輩からの寄稿もあります。最近、若い方も徐々には増えてきておりますが、まだまだ少ないのが現状です。これからはもっと若い方からの原稿も増えてほしいのですが、むやみに寄稿を呼び掛けるだけでは限界があります。経費等クリアしなければならない問題がいくつかありますが、例えば、記事にQRコードを付けて、それをスマートフォン等で読み取ると同窓生の今が動画で見られる等、若い方も興味を持つような誌面にしていくことも必要ではないかと考えております。あらゆる世代の同窓生が寄稿してみたいと思われる農工通信、早く読んでみたいと思われる農工通信を目指して、これからもより一層親しみの持てる誌面作りに取り組んでまいります。農工通信は大学や先生、同窓生を繋ぐパイプです。今では大学のホームページがあるため、現在の大学の様子などはパソコン等で簡単に見ることができますが、同期や部活の仲間達の動静は窺い知ることができません。その役目を担うのが農工通信（後期号）です。今後とも皆様からのご寄稿を宜しくお願い致します。



蚕養草四
溪斎榮泉



蚕養製ノ図
橋本直義

東京農工大学科学博物館収蔵
錦絵より（一）

「農工通信」年表

「農工通信」のこれまで

同窓会誌「農工」に替わり、新たに「農工通信」が1964年（昭和39年）に発刊されました。その第1号はB5版の8頁（表紙貼付）で、新同窓会の発足についての記事が掲載されています。その後、毎号の定例記事として、同窓会理事会・総会報告、同窓会長の挨拶、新任学長の就任挨拶、「母校だより」（後に「学園だより」に改題）、卒業生名簿等、さらに大学関係者からの随想等も多く掲載されました。

2006年の77号より、農工通信の紙面がB5版からA4版に大きくなり、表・裏紙をカラーに刷新され、これまで年2回発行が年1回発行に変更され、1冊（号）の分量が倍増されました。新しく叙勲受賞報告も加わりました。「母校だより」が掲載される頃（2006年頃）までは、農工通信には大学の情報が昨今よりも多い傾向でした。そして、2012年度（発行は2013年1月）より、「農工通信」が再度、年2回発行になり、現在に続いています。現在の「農工通信」は前期号（同窓会や大学情報など）、後期号（同窓生からの寄稿集）で構成されています。特に後期号には同窓生の近況、随想、大学時代の思い出等が披露され、同窓生間の絆を紡ぐ同窓会誌の役目が期待されています。



「農工通信」第1号

農工通信（後期号）編集委員会

号 発行年月	「農工通信」記事（トピックス）	社会の動き
1. 1964年6月 (S39年)	・「農工通信」の発刊、同窓会総会報告、 ・新同窓会の発足関連等 《B5版、8頁（表紙貼付）》	東京オリンピック 中国文化大革命（'65）
3. 1966年5月	*学長就任挨拶（近藤頼巳氏）、*大学院農学研究科発足	欧州共同体(EC)成立
4. 1967年7月	・理事長就任挨拶（小野四郎氏） ・初の卒業生就職先・進学先一覧掲載 *大学院工学研究科発足	ASEAN結成 3億円強奪事件
5. 1968年7月	・同窓会会長就任挨拶（賀集益蔵氏）	アポロ月面着陸、東名開通
6. 1969年11月	・同窓会の発足、資料部だより（製糸の錦絵と生糸、繭標百年）	沖縄返還、日中国交回復
9. 1972年5月	・副会長挨拶「新会員を迎えるにあたって」（堀録助氏）等 《本年度より年2回発行》	円の変動相場制
10. 1972年7月	理事長挨拶「新に正会員を迎えて」（堀岡邦典氏）等、卒業生名簿を掲載（全16頁、内名簿13頁）	野球巨人V9
11. 1973年5月	*新学長挨拶（福原満州雄氏）	関門橋開通
12. 1973年11月	・事務局だより（本会の在り方、組織の検討）、（寄稿）タイの経験等	堀江謙一ヨット世界一周
13. 1974年4月	・理事長就任挨拶（南澤吉三郎氏）、*連合大学院の近況等	経済戦後初のマイナス成長
14. 同年9月	・卒業式祝辞（同窓会会長代行堀録助氏） *大学入学者数報告（683人）	新幹線東京-博多全通
15. 1975年4月	*農工大ヒマラヤ登山隊帰国挨拶等	第一回サミット（パリ）
16. 同年9月	・卒業式祝辞（同窓会会長堀録助氏）、・母校創立100周年記念事業準備委員会発足に当って	南北ベトナム統一
17. 1976年4月	・母校創立記念事業について（理事長 高領 浩氏）	中国毛沢東主席死去
18. 同年6月	・会員通信（海外だより）2件工学部の門札について	気象衛星「ひまわり」打上
19. 1977年4月	・（寄稿）親子孫の西ヶ原三代記	1 \$ 238円（ドル最安値）
20. 同年10月	・第15回同窓会理事会・総会報告（母校創立記念事業について）	成田空港開港
21. 1978年6月		

号 発行年月	「農工通信」記事（トピックス）	社会の動き
22. 同 年11月	・ 母校創立記念事業について（経過報告）、（寄稿）同じ農工大で学ぶ因果な父子（親子二代記）	日中友好条約調印
23. 1979年 6月	* 学長就任挨拶（諸星静次郎氏）、駒場寮30年史刊行計画等	国公立大共通一次開始
24. 同 年11月	* 大学創基百年、設立30周年記念特集号（文部大臣内藤誉三郎氏祝辞）、* 記念誌「東京農工大百年の歩み」刊行について	東京サミット開催
25. 1980年 6月	* 自動車部オーストラリア遠征記	銀行現金自動払機開発
26. 同 年11月	・（財）農工大後援会の強化について（理事長 高嶺 浩氏） * 母校ニュース（キャンパスだより）《本号より母校ニュース開始》	ワシントン条約発効 モスクワオリンピック西側ボイコット
27. 1981年 7月	・ 母校創立記念事業の完了に当って（理事長 高嶺 浩氏） 《これ以降、発行時期が7月、11月に定着》	米スペースシャトル成功 常用漢字告示
28. 同 年11月	・（財）東京農工大後援会の発展のために（前理事長 高嶺 浩氏） * 随想（日産自動車、ニュートンのリンゴの木）* 母校ニュース（保健管理センター活動、機械工場、研究動向）	国鉄赤字ローカル線廃止
30. 1982年11月	* 農工大創基百年記念事業基金の寄付募集について（後援会長 向山文雄氏）、* 母校ニュース（学科名称の変更—製糸学科から繊維高分子工学科へ、研究の国際交流（国際会議、シンポジウム参加記）	500円硬貨発行 東北&上越新幹線開業 テレホンカード使用開始
32. 1983年11月	* 母校ニュース（学科紹介） ・ 農工大後援会報告 《この頃より編集様式が定着。定例報告として母校ニュース、支部だより、クラス会だより、随想、海外だより、卒業生名簿等》	東京ディズニーランド開園 通信衛星（さくら）打上げ
33. 1984年 7月	・ 第21回同窓会理事会・総会報告	日経ダウ初の1万円乗せ
34. 同 年11月	・ 農工大後援会の募金事業を終えて（後援会副会長、同窓会理事長）、* 母校ニュース（外国人留学生の近況、アーヘン工科大学と交流等）	1万円、5千円、千円新札 NHK衛星放送開始
35. 1985年 7月	* 新学長挨拶（喜多勤氏）	日航ジャンボ機墜落
36. 同 年11月	* 随想（研究の思い出—前学長諸星静次郎氏） * 母校ニュース（繊維機械保存館、情報処理センター、学術国際交流情報）	青函トンネル開通 NTT、JT株式会社発足
37. 1986年 7月	* 随想（バイオマグネット—資源応用化学科助教松永是氏）	ソ連チェルノブイリ原発事故
38. 同 年12月	* 母校ニュース（農工大の学術研究の国際交流の現状と展望）、* 浙江農業大学（中国）との姉妹校提携、* 第1回農工大先端科学技術展の開催、* 随想（遺伝子工学と植物の育種）	ハレー彗星地球大接近 東京サミット開催
39. 1987年 7月	・ 卒業生（新会員）名簿 * 随想（バイオサイエンス雑感—工業化学科助教松岡英明氏）	国鉄民営化
40. 同 年11月	* 母校ニュース（北京工業学院及び南京林業大学との姉妹校成立）	株式ブラックマンデー 東京市場も暴落
42. 1988年11月	* 付属図書館（農学部）新装（報告）、* 随想（2件）、紀行（1件）	東京ドーム完成、瀬戸大橋開通
43. 1989年 7月 (S64 / H元年)	* 新学長就任挨拶（阪上信二氏）、* 校章（由来）について（東京農林専門学校「菊・桐」+東京繊維専門学校「桑・繭」「櫛」）、* 蚕糸科学教育記念碑建立	消費税開始 ベルリンの壁崩壊
44. 同 年12月	* 母校ニュース（チュラロンコン大学「タイ」との姉妹校提携—これまでの姉妹校7校）、* 随想（校章について）、（近況）「JR国分寺駅ビル建設、京王線府中駅の高架化」	
45. 1990年 7月	* 大学だより（農学部改組、連合獣医研究科博士課程発足）、随筆（1件） 《卒業生名簿—全24頁、内7頁》	東西ドイツ統一 第1回大学入試センター試験
46. 同 年12月	* お知らせ（東京高等蚕糸学校記念碑建立—大蔵省印刷局東京病院内、公開講座の開講、研究室だより） 《本号より「母校ニュース」を「学園だより」に改名》	

号 発行年月	「農工通信」記事（トピックス）	社会の動き
47. 1991年7月	《本号は表・裏紙がカラー、表・農学部、裏・工学部の全景》	ソ連崩壊
48. 同年12月	《表紙・裏表紙共白黒》	バブル経済崩壊
49. 1992年7月	同窓会理事長等の就任挨拶、学園だより（新蚕品種から伝統織物が生まれるまで）	東海道新幹線「のぞみ」 学校5日制スタート
50. 同年12月	《本号の表紙・裏表紙が再度カラーに》 *学園だより（演習林、社会人編入制度、母校発祥の地の文化財説明板を日比谷に設置、農学部内を川が流れていた、材料システム工学部会—学科創設50周年記念事業など）	P KO協力法成立
51. 1993年7月	・同窓会会長就任挨拶（久保田富一郎氏）、*学園だより（府中農場の圃場均平化工事ならびに畜力農機具資料室完成—感謝のつどい開かる）	Jリーグ開幕 環境基本法成立
52. 同年12月	・堀禄助名誉会長を悼む、・初代理事長夏目正先生のご逝去を悼む *総合屋内運動場施設落成	日本初の世界遺産—法隆寺、姫路城
53. 1994年7月	・理事長就任挨拶（志村勲氏）、・（会員だより）第1回「われら農工大ファミリー」（本間慎農学部教授—同教授兄弟3人が農工大OB）	外国為替100円/\$突破 大江健三郎氏ノーベル賞
54. 同年12月	*掲示板（駒場寮母・前川さんの米寿を祝う会（米沢）、*学園だより（メルボルン8ヶ月研究—松村昭治氏）、工学部組織変遷）	女性宇宙飛行士向井氏
55. 1995年7月	・同窓生・東京集会開催（非支部組織）、*学長就任挨拶（梶井功氏）、*農工大第3部局（生物システム応用科学研究科）誕生、・工学部（生命工等）、農学部（大講座制等）の学科改組	阪神淡路大震災 地下鉄サリン事件 PL法施行
56. 同年12月	《全24頁、卒業生名簿9頁》 ・ラグビー部創部45周年OB総会開催、・準硬式野球部創立40周年祝賀会開催	YahooJAPAN開始 ポケモン発売
57. 1996年7月	・理事長就任挨拶（東野文男氏）	
58. 同年12月	*随想（新しい大学の模索—小原嘉明氏）、*櫛寮建寮30周年記念祭	
59. 1997年7月	*学園だより（実験昆虫の確立に向けて—浜野国勝氏、「逆転写酵素」の発見者について—高橋健名誉教授）、*平成8年度国立大学等優秀広報誌等表彰ホームページ部で最優秀賞（総合情報処理センター）	香港中国に返還 地球温暖化防止京都会議
60. 同年12月	*学園だより（ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー設立のご紹介—ラボラトリー長 永井正夫氏） 遺伝子実験施設について（施設長岩花透典氏）、超伝導体の作製技術と新しい超伝導体の発見（応用化学科高橋直行氏）、・大野乾氏（獣畜S24）に母校の名誉博士第1号	臓器移植法施行 消費税5%
61. 1998年7月	*学園だより（カリフォルニア農業視察記—農学部附属農場神田修平氏）、・新事務局長に瀬木秀保氏（製糸S31）就任	長野冬季五輪 NPO法施行
62. 同年12月	*本学のベトナム姉妹校カントー大学紹介（名誉教授大江礼三郎氏） *新しくなった小金井分館の紹介（変わる図書館・変わらない図書館）	サッカー W杯日本初出場
63. 1999年7月	・農工大同窓会日中友好視察団旅行記—重松正矩氏）、*学園だより（工学部1年次の小金井キャンパス移行—梅田倫弘氏、霊長類に利き手はあるか—武田庄平氏）	日銀ゼロ金利政策 NTTドコモ開始 ソニー子犬型ロボット発売
64. 同年12月	・同窓会会長就任挨拶（西尾邑次氏）、*農工大学創立50周年記念式典挙行、*学園だより（新しく設置された国際環境農学専攻について）	
65. 2000年7月 (H12年)	*学園だより（FSセンターの発足、化学系の改組について）、 ・東京支部の発足（第37回同窓会総会にて承認）、・理事長就任挨拶（坂野好幸氏）	「ハッピーマンデー」実施 三宅島噴火
66. 同年12月	*巻頭（21世紀を迎えるに当たって同窓会に期待するもの—下田元理事長）、・同窓会のホームページ開設、農工大準硬式野球部創立50周年記念	白川英樹氏ノーベル賞 BSデジタル放送開始

号 発行年月	「農工通信」記事（トピックス）	社会の動き
67. 2001年7月	*学長就任挨拶（宮田清藏氏） ・東京支部平成13年度に発足予定、*農工大TLO（株）設立	米国同時多発テロ JR東日本「Suica」導入
68. 同年12月	*学園だより（黄河下流域の土と水—岡崎正規氏、太陽電池のさらなる普及を目指して—上迫浩一氏）、*東京農工大学TLOについて（会社発足説明）、*お知らせ（農工大創立50周年記念事業募金の報告とお礼、農工大後援会の活動報告）	日経株価1万円を切る 野依良治氏ノーベル賞
69. 2002年7月	・理事長就任挨拶（小原嘉明氏）*農工大創立50周年記念会館（現エリプス）竣工報告	日朝平和宣言 欧州単一通貨ユーロ
70. 同年12月	・理事長挨拶（小原嘉明氏）—「新しい試み」（農工通信の魅力アップ、支部総会の活性化）、*学園だより（トレーサビリティ地産地消システム構築、ナノ未来材料が目指す世界最高水準の研究拠点紹介、新エネルギー物質代謝と生存科学の構築等）、*お知らせ（農工大TLO報告、・キャリアアドバイザー制度スタート）	サッカーW杯日韓大会 小柴、田中氏ノーベル賞 学生の就職氷河期続く
71. 2003年7月	・同窓会会長就任挨拶（畑中孝晴氏）、*学園だより（時事解説—BSE問題とこれからの畜産、農工大インキュベータ竣工報告）、その他：農工大TLO（株）紹介、キャリアアドバイザー紹介 《全28頁、内、卒業生名簿7頁》	イラク戦争 テレビ地上デジタル放送開始
72. 同年12月	*学園だより（農工大法人化の取り組みと大学院の再編成、変わる大学院教育）、・同窓生だより（AT-Netz紹介、研究と広報活動の間で） 《72号以降は編集様式が一新され、記事毎にパターンを統一》	
73. 2004年8月	*農工大の国立大学法人化について（挨拶・宮田学長）、・学園だより（農工大の研究—鳥インフルエンザについて）	国立大学法人化 地下鉄民営化東京メトロ誕生
74. 同年12月	・同窓会会議室の完成報告、*学園だより（ABUロボコン4位入賞報告、ITS研究開発の取り組みについて）	
75. 2005年7月	*学長就任挨拶（小畑秀文氏）、学園だより（研究紹介—最適化問題ソバルに関する現状、北シベリア永久凍土におけるマンモス）、*随想（武蔵野で演出する楽農社会）	愛知万博開催 クールビズ開始
76. 同年12月	・同窓生だより（園芸界殿堂入り—須田峻一郎氏）、*学園だより（スーパー産学官連携本部整備事業、農工大におけるF-AE活動）、*研究紹介（農工大における農作物品種育成等） 《「農工通信」の発行変更（同窓会総会議決一次号より発行を年1回とし、1回に2回分の分量を収録、全10頁）》	
77. 2006年8月	・理事長就任挨拶（生原喜久雄氏）、同窓会会長挨拶（農工通信、HPのリニューアル等）、卒業生名簿、同窓会学生援助事業報告、同窓生の寄稿募集と寄稿掲載 《学生援助事業報告を以降は定例報告、「農工通信」を同窓生による寄稿30稿で全51頁、農工通信の紙面刷新しB5判をA4判に変更し、表紙・裏表紙共カラーに》	高齢者(65歳以上)が20% 安倍内閣誕生
78. 2007年8月	・同窓会の事業について（畑中会長—創立50周年事業、会員名簿の発行財政問題等）、・同窓生の寄稿（32稿） 《本号より定例報告として（卒業生名簿、部会・支部・クラス会報告を掲載）—(本号以降割愛)》 《裏表紙に「賞典録」広告の初披露目》	郵政事業民営化 全国学力テスト実施
79. 2008年8月	・理事長就任挨拶（亀山秀雄氏）同窓会創立50周年記念事業の発足にあつて（畑中会長）、・叙勲受賞報告（6人）、・同窓生の寄稿（25稿） 《本号より叙勲者紹介を掲載—(本号以降、叙勲受賞報告定例化を掲載全61頁)》	リーマンショック iPhone日本発売 日本人4人ノーベル賞

号 発行年月	「農工通信」記事（トピックス）	社会の動き
80. 2009年11月	・同窓会会長就任挨拶（藤森明彦氏）、・同窓生からの寄稿（22稿）	裁判員制度スタート
81. 2010年11月	・同窓会創立50周年記念事業寄付者一覧、・同窓生の寄稿（32稿）	小惑星探査機、地球帰還
82. 2011年11月	*学長就任挨拶（松永是氏）、・理事長就任挨拶（高橋幸資氏）、・同窓会創立50周年記念事業募金終了、寄附者一覧、東日本大震災救援募金者一覧、同窓生の寄稿（30稿）、・同窓会50年史座談会（記録） 《全89頁—これまでの最大頁数》	日本人2人ノーベル賞 東日本大震災発生 サッカー女子W杯日本優勝
83. 2012年9月 (2012年度前期号)	・理事長就任挨拶（渡邊敏行氏）、農工大同窓会創立50周年記念式典の開催（報告） 《本号より「農工通信」を年度2回発行に変更》 ・〔前期号〕同窓会報告、部会・クラス会だより、卒業生名簿、お知らせ、大学近況等を掲載、・〔後期号〕同窓生の寄稿、大学情報等を掲載	東京スカイツリー開業 山中伸弥氏ノーベル賞 全原発停止
84. 2013年1月 (2012年度後期号) (以下、同様)	・「農工通信」1月発行号を同窓生の寄稿集として発行（33稿）、 《寄稿内容を分類編集、表紙絵も同窓生による作品（絵画等、全38頁）》、・82号の多くの寄稿を受け独立の寄稿集を発行	IOC総会東京開催決定 将棋プロ棋士コンピュータに負ける
85. 同 年9月	・同窓会会長就任挨拶（草野洋一氏）、学生援助事業報告について本号より記事を短縮—支援詳細を省略	「和食」ユネスコ無形文化遺産
86. 2014年1月	・西尾邑次名誉会長追悼文、・同窓生の寄稿（55稿）	過激派IS国家宣言
87. 2014年8月	・理事長就任挨拶（鈴木創三氏）	御岳山噴火
88. 2015年1月	・西川公也農林水産大臣に聞く（インタビュー 亀山秀雄氏）、・同窓生の寄稿（49稿）、*掲示板：情報（大学情報）を掲載	日本人3人ノーベル賞 日経平均2万円台回復
89. 同 年8月	・（掲示板）同好部会の設立と案内	ラグビーW杯初の3勝
90. 2016年1月	・同窓生の寄稿（58稿）—本号より「農工大の今」と題した現役学生の活動（サークル等）の掲載を開始 《全51頁》	日銀マイナス金利導入 日本人2人ノーベル賞
91. 2016年8月	・理事長就任挨拶（滝山博志氏）	米大統領選でトランプ氏勝利
92. 2017年1月	・特別企画「母校の誇り、農工大の偉人たち」の連載を開始（寄稿3人） ・同窓生の寄稿44稿）	プレミアムフライデー （働き方改革）
93. 同 年8月	・同窓会会長就任挨拶（能條武夫氏）、*学長就任挨拶（大野弘幸氏）	九州豪雨
94. 2018年1月	・「特別企画」（寄稿2人）、・同窓生の寄稿（41稿）	米朝初の首脳会談
95. 同 年8月	・一般社団法人化に伴う代議員選挙について (同窓会法人化 2018年10月1日から一般社団法人として)	プラストロー廃止の動き
96. 2019年1月 (H31年)	・「特別企画」（寄稿1人）、・同窓生の寄稿（34稿）、・事務局だより	本庶氏ノーベル賞 天皇初の生前退位、改元
97. 同 年8月 (R元年)	・同窓会会長就任挨拶（栗原績氏）、理事長就任挨拶（千年篤氏）、同窓会定時総会報告、・（掲示板）企業内の農工大同窓生との連携の提案、*三大学大学院（多摩地区国立大）の連携研究スタート	ラグビーW杯日本大会 消費税10%に
98. 2020年1月	・「特別企画」寄稿（1人）、・同窓生の寄稿（40稿）	新型コロナウイルス世界的
99. 同 年8月	*学長就任挨拶（千葉一裕氏）、役員挨拶、同窓会定時総会報告、叙勲受賞（小畑元学長）、第2回代議員選挙について	大流行（パンデミック）と その対応（世界を揺るがす）
100. 2021年1月	・農工通信（100号）記念として、学長、同窓会会長の挨拶、農工通信の年表等および同窓生の寄稿を掲載。また、表紙絵を科学博物館保存の由緒ある「養蚕」の錦絵で飾った。	

《注釈》「農工通信」年表記載について

農工通信の記事には、同窓会総会報告、挨拶などの定例的な報告があります。内容は非常に重要ですが、年表には内容の詳細は記載せず、また頁数の制約もありますので、特に内容に大きな変化がない場合は掲載しませんでした。また、役員等の挨拶等は就任時のみとしました。その他、支部だより、部会だより等々の定例報告等および特段の情報がない発行号の掲載は割愛しました。

表中の記号：・印は同窓会情報、*印は大学情報、《 》内は編集者注記

八王子同窓会の森のこれから

同窓会副理事長 戸田 浩人（林学院 S61）

東京農工大学同窓会が八王子市と分収林契約を結んでいたことを、ご存知の方は多くないと思う。分収林契約とは、林野に地上権を設定し人工林を成立させ、伐採で得られた収入を地権者と分割する契約である。令和2（2020）年3月末をもって、八王子市との分収林契約を解消したが、諸先輩が育てた森林として標柱等を新たに建てることと、同窓会の森を核として、八王子市とは自然環境保全や環境教育などの分野で協力していくことを確認した。この同窓会の森の設置経緯とこれまでの歩みについて報告する。

歴史を振り返ると、本学農学部の前身である東京高等農林学校の駒場学友会（学生と教職員を会員とする団体）によって、紀元2,600年記念として記念林設置事業が企画され、当時の浅川町有地の山林に地上権設定が行われた。契約者は当時の学校長であり、また、東京高等農林学校駒場学友会会長であった小出満二氏である。地上権設定による目的は、スギ、ヒノキ、アカマツの造林をもって記念林とすること、期間は昭和15（1940）年4月1日から昭和55（1980）年3月31日までの40年間となっていた。当初は浅川記念林、浅川分収林とよばれ、後に八王子分収林そして八王子同窓会の森と変遷していくことになる。

浅川町との契約後、植林はされたものの第二次世界大戦のため造林地の手入れもできず、ほぼ放置された状態になっていたとのことである。昭和28（1953）年3月に浅川町より契約継続の意思について問い合わせがあり、契約当時の責任者も交代しており駒場学友会も解散していたため、一旦は契約解除を申し出るようになった。しかし、この際に駒場校友会（旧同窓会）として契約することで、将来同窓会の財産にすることが検討され、浅川町へ再契約を申し出た。そして、東京農工大学駒場交友会会長と（浅川町が合併し八王子市となったため）八王子市長との間で再契約が確認され、昭和36（1961）年11月に契約を結び地上権設

定を昭和65（1990）年3月31日まで延長することになった。

分収林の初期の運営は、上述のように第二次世界大戦の真ただ中であり、不十分にならざるを得なかった。八王子市との再契約後、昭和28（1953）年と昭和34（1959）年に植栽されたスギ、ヒノキ林に対し、昭和47～48（1972～1973）年にかけて、除伐（侵入広葉樹および不良植栽木の切り捨て）、つる切り、高さ3mまでの枝打ちなどの保育作業が積極的に行われている。こうした諸先輩の尽力により、立派な人工林として成林したが、平成2（1990）年時点で50年生未満であるスギ・ヒノキ林伐採は、木材価格の低迷などもあり経済的に不利であることから、契約の再延長を繰り返してきた。現在の八王子同窓会の森は、60年生超えの美林となっている。

令和2（2020）年3月に契約期間が満了するため、同窓会で検討を重ね、同地のスギ・ヒノキ林を利潤目的で伐採するべきではなく、契約を解消し八王子市に林木を残したまま返還することとした。その理由は、①同窓会が非営利型の一般社団法人として改組され、収益目的の分収造林契約の継続は目的にそぐわないこと、②伐採木の搬出路確保のための補助金獲得の目途が立たず、木材市況も好転の兆しが見えず一斉皆伐採しても赤字になる可能性が高いこと、③現地は近年、高尾山への登山道として人気があり平日でも多くの登山客がみられ、観光資源としての景観を皆伐によって破壊することが懸念されること、④昨今の豪雨災害の多発に対して大規模な皆伐は、地域住民の防災感情を損ねることになることが危惧されるなど、社会情勢や周辺環境の変化があり、八王子市との分収林契約を履行するための伐採が、登山客や地域住民の方々との軋轢を生む原因となることは、東京農工大同窓会活動の趣旨にそぐわないと判断したためである。

なお、本契約の解消にあたっては、冒頭に述べ

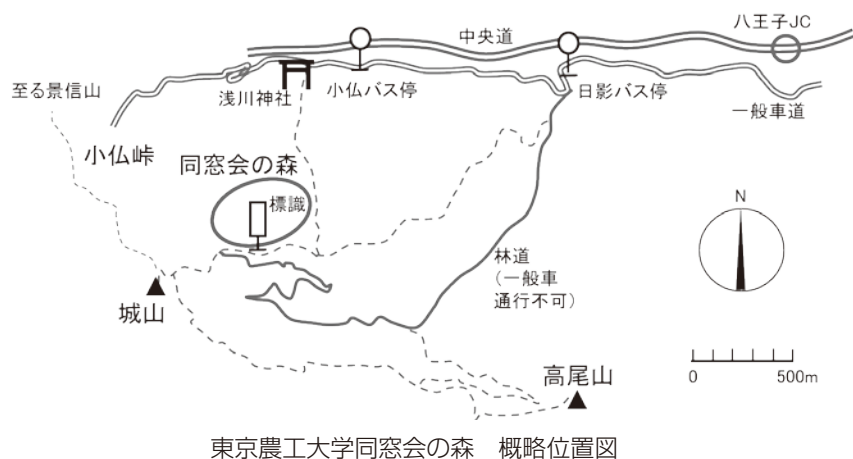
たように、これまで東京農工大学と八王子市が育ててきた「同窓会の森」であることを示す標柱等を新たに建てることと、今後は八王子市と自然環境保全や環境教育などの分野で協力関係を築いていくことを確認した。「東京農工大学八王子同窓会の森」の場所は、高尾山から小仏峠、陣馬山へのハイキングコースに近く、城山の無線中継所から数分である。こちらの方面へお出かけの際は、ぜひ足を延ばし、諸先輩の育てた森林をご覧いただければ幸いである。



尾根部の平地と現在の看板 2017. 4撮影



平地に間伐材で設置したベンチ 2017. 7撮影



府県名所図会 富岡製糸場 三代歌川広重



養蚕教育図 作者不詳

東京農工大学科学博物館収蔵

錦絵より(二)

第2回代議員選挙について

選挙管理委員長 峰松 敏夫

第2回代議員候補者の部会・支部からの推薦及び立候補を9月30日に締め切りました。その結果、候補者が197名で代議員定数242名に達しませんでしたので「代議員選出方法に関する規則」第10条に基づき、候補者全員を当選とします。

次期代議員名簿（任期：令和5年総会終了時まで）

（部会関係代議員）

推薦母体	代議員氏名 (卒業・修了年)	代議員氏名 (卒業・修了年)	代議員氏名 (卒業・修了年)	代議員氏名 (卒業・修了年)	代議員氏名 (卒業・修了年)	代議員氏名 (卒業・修了年)	代議員氏名 (卒業・修了年)
部会長会	五味 勝 (電子S54)						
農学・生物生産学部会	内藤 廣信 (農学S41)	板橋 久雄 (農学S39)	早川 潔 (農学S41)	南波 利昭 (農学S46)	横山 正 (農学S53)	大川 泰一郎 (農学S62)	滝沢 将史 (生産H8)
蚕糸生物学部会	安藤 俊幸 (蚕糸S49)	菊池 雅美 (蚕糸S56)					
植防・応用生物学部会	仲井 まどか (植防S62)	安藤 哲 (植防S47)	國見 裕久 (養蚕S48)	寺岡 徹 (植防S50)			
農芸化学・応用生命化学部会	伊藤 猛 (農化S56)	高品 知典 (農化S58)	田中 智章 (農化S60)	坂口 政吉 (農化H5)	神保 希望 (応生H24)	市川 めぐみ (応生H24)	
林産・生物資源工学部会	近江 正陽 (林産S60)	佐藤 敬一 (林産S56)	安藤 恵介 (林産H2)	吉田 誠 (環資H12)			
環境科学部会	伊豆田 猛 (環保S59)	多羅尾 光徳 (環保H3)	渡邊 誠 (環資H11)	黒岩 恵 (環資H22)			
林学部会	本山 芳裕 (林学S48)	難波 伸幸 (林学S49)	塚原 道夫 (林学S51)				
生産環境工学部会	大里 耕司 (農工S52)	川田 明宏 (農工S51)	帖佐 直 (農工H4)				
地域生態システム学部会	小池 伸介 (地生H13)	山口 泰民 (地生H12)	八色 宏昌 (地生H12)	大倉 茂 (地生H19)	深井 敬哲 (地生H20)		
獣医学部会	田谷 一善 (獣医S46)	津曲 公夫 (獣医S43)	木島 まゆみ (獣医S58)	川口 真以子 (獣医H9)			
製糸・高分子・生命工学部会	大塚 克巳 (製糸S45)	安田 勝年 (製糸S42)	花輪 正明 (製糸S46)	中島 健一 (製糸S58)	近藤 幹也 (製糸S58)	熊澤 志津子 (高工H4)	
繊維・有機材料部会	三田 武 (織工S46)	岩島 寛 (織工S33)	壁矢 久良 (織工S35)	原島 朝雄 (織高S49)	金子 由実 (織高S51)		
化学工学部会	高野 文夫 (化工S51)	板垣 和雄 (化工S48)	紫垣 由城 (化工S52)	加藤 之貴 (化工S60)			
応用分子化学部会	前川 佳博 (工化S48)	轟 秀彦 (工化S39)	伊王野 耕二 (工化S39)	遠藤 幸一 (工化S46)	平野 正雄 (工化S48)	太田 克朗 (工化S50)	
機械システム工学部会	澤田 孚夫 (機械S40)	今成 昌文 (機械S57)	大谷 幸利 (機シスS62)	武藤 篤生 (機シスH1)	北村 光 (機械H2)	中村 秀一 (機シスH2)	渡邊 力夫 (機シスH5)
		西澤 宇一 (機シスH12)	伊藤 幸弘 (機シスH14)	山本 将之 (機シス工博H14)	太田 亨 (機シスH14)	福田 歩 (機シスH16)	
電気電子工学部会	竹村 淳 (電子H3)	飯村 靖文 (電子S56)	有馬 卓司 (電情H10)				
物理システム工学部会	水野 隆司 (応物S46)	大野 直次 (応物S47)	関根 朝次 (応物S47)	佐伯 尚文 (応物S49)	伊東 浩 (応物S52)		
情報工学部会	王 大慶 (情報院H24)	朱碧蘭 (情コミH15)	古宮 嘉那子 (情コミH17)				
MOT部会	加藤 美治 (MOT H21)	野地 英昭 (MOT H20)					
BASE部会	二見 能資 (生シ院H17)	赤井 伸行 (生シ院H16)	岡村 拓弥 (生シ院H29)	市原 凜太郎 (生シ院H29)			
連合農学部会	船田 良 (連農S63)	野村 義宏 (連農H2)					

（支部関係代議員）

推薦母体	代議員氏名 (卒業・修了年)	代議員氏名 (卒業・修了年)	推薦母体	代議員氏名 (卒業・修了年)	代議員氏名 (卒業・修了年)	推薦母体	代議員氏名 (卒業・修了年)	代議員氏名 (卒業・修了年)
北海道	荒木 和秋 (農学S50)	濱口 大志 (農工H2)	石川	森倉 正信 (養蚕S48)	大澤 豊昭 (農工S54)	山口	松村 聡 (工化S46)	馬場 崇史 (分子H27)
青森	大橋 統州 (農学S54)	楠美 祥行 (電子S58)	福井	野坂 雄二 (農工S53)	小堀 健司 (農工S62)	鳥取	江原 宏昭 (農学院S48)	門脇 互 (製糸S54)
秋田	野村 俊悦 (農学S44)	舩谷 雅広 (農工S61)	山梨	木村 靖郎 (林学S45)	原 昌司 (蚕糸S60)	島根	桑本 幸夫 (林産S56)	松浦 史瑞 (林産H1)
岩手	深澤 光 (林学S56)	藤原 哲雄 (農学S60)	長野	相馬 正博 (農学S53)	飯島 好文 (農工S59)	香川	鳥取 康治 (織高S51)	遠藤 克彰 (機シスH24)
山形	河野 詠 (獣医S45)	大嶋 博之 (植防S60)	岐阜	工藤 正弘 (織工S44)	雨宮 功治 (植防S60)	徳島	長谷川 進 (工化S47)	小杉 純一郎 (林学S63)
宮城	鈴木 正彦 (林学S57)	相澤 孝夫 (林学院S58)	静岡	杉山 嘉英 (林学S52)	天野 弘 (獣医S53)	高知	寺峰 孜 (養蚕S45)	豊田 陽一 (蚕糸S57)
福島	荒井 賢治 (農工S47)	渡部 正明 (環保S55)	愛知	瀧上 紀吉 (機械S41)	瀧川 桂三 (林学S47)	愛媛	池上 正彦 (蚕糸S52)	鋤先 孝一 (環保S52)
茨城	川野 和彦 (林学S50)	水庭 博 (林学S49)	三重	古野 優 (獣医S60)	西野 実 (生産H7)	福岡	野上 寛五郎 (林学S39)	白石 哲広 (林産S50)
栃木	南木 好樹 (農工S58)	牧 佳輝 (獣医S41)	大阪	佐々木 良和 (農工S39)	森田 成昭 (機シスH8)	佐賀	御厨 秀樹 (植防S56)	狩又 亮治 (生産H24)
群馬	山本 明 (農工S45)	藤井 昇 (蚕糸S51)	京都	西村 寿 (農工S50)	松井 崇 (農工S51)	長崎	内山 満 (林学S49)	古賀 淳士 (農学S52)
埼玉	金本 伸郎 (農学S51)	山水 高男 (植防S53)	滋賀	川島 長治 (農学S39)	南井 隆 (林学H1)	熊本	田中 良典 (植防S51)	堀 洋一 (織高S51)
千葉	伊藤 道男 (林学S48)	家壽多 正樹 (農学S59)	奈良	山本 治幸 (電気S54)	宮本 大輔 (農学H2)	大分	松久 房義 (蚕糸S50)	永野 和範 (農工S63)
東京	栗原 知 (林学S47)	大井 行史 (林学S35)	和歌山	毛呂 眞 (林学S41)	中尾 俊二 (林学S53)	宮崎	池田 典昭 (林学S49)	山下 博 (農工院S46)
神奈川	真子 正史 (農学S41)	中村 寛也 (環保S61)	兵庫	上坂 修一 (林産S54)	石田 あずさ (農工H4)	鹿児島	二俣 文生 (農工S45)	平 繁人 (養蚕S45)
新潟	矢澤 正宏 (農工S44)	宮里 圭一 (環保S53)	岡山	岡山 渡邊 直人 (林学S50)	谷 智仁 (林学S61)	徳島	糸数 剛 (農工S45)	花城 薫 (林産H3)
富山	林 繁利 (工化S39)	小杉 啓一 (林学S54)	広島	三宅 信行 (環保S55)	石田 一之 (機械S59)	横濱会	草野 洋一 (養蚕S47)	

（立候補代議員）

候補者氏名 (卒業・修了年)	候補者氏名 (卒業・修了年)	候補者氏名 (卒業・修了年)	候補者氏名 (卒業・修了年)
岩本 洋彦 (植防S42)	松井 英輔 (林学S38)	清水 洋一 (林産S53)	住本 敏泰 (電気S61)
相馬 包吉 (農工S42)	西浦 忠輝 (林産S45)	山田 貴久 (MOT H21)	



新型コロナウイルス感染症に伴う 東京農工大学基金へのご支援について



同窓会事務局長 池谷 紀夫

新型コロナウイルス感染症に伴う東京農工大学基金へのご支援をお願いしたところ、多くの方々からのご寄附をいただきました。9月30日段階での状況を大学からいただきましたのでご報告いたします。収支報告につきましては、大学のホームページに掲載を予定しています。

学長、同窓会長も皆様のお気持ちに感激されておられました。今後も継続的に支援活動をしていく予定になっております。

「東京農工大学基金」寄附者一覧

ご寄附を賜りましたみなさまのご芳名を深い感謝とともに掲載させていただきます。

同窓生、在校生・そのご家族、元教員（50音順、敬称略）
令和2年9月末現在

会田 綾子	池ノ上 功	上田 裕	大塚 淳	金箱 利夫	久保田昌二	小林龍一郎
青木 襄児	池谷 紀夫	上野 久	大伴 秀郎	加納 茉奈	窪田 有孝	小武山弘之
青木 将幸	石井 昭一	上野 真生	大野 邦彦	上村 恵也	熊田 和典	近藤 豊
穂田 真澄	石井 忠	植原 貞範	大野 弘幸	亀井 實	倉富 敦	佐伯 悦二
秋野 隆仁	石垣 規雄	宇佐美宏行	大場健太郎	加持 真人	倉持 由衣	三枝 俊哉
阿久津四良	石村 朋久	碓井 敏宏	大堀 公司	唐木澤威人	栗原 績	齋藤日佐郎
浅野 恵美	石本 隆英	内山 浩隆	大山 拓正	唐津加代子	黒澤 宏	坂口 利宗
浅見 昌敏	石山 宏治	内山 力哉	岡 秀行	河合顕太郎	黒田 勝士	坂本 浩之
梶間祐一郎	市川 温彦	宇都宮晶男	岡崎 尚夫	川田 明宏	小泉 豊	櫻井 邦雄
阿部 哲朗	市川 高年	宇土 重徳	岡崎 雅子	河田 直彦	小出 幹雄	櫻井 友尚
安部 浩	市野 富雄	鵜野 昭二	小笠原敏行	河田 伸人	額 明伯	佐々木良和
阿部 靖則	一蝶 彬	宇野澤正美	岡村 学	川手日出子	河野 詠	佐治 領一
阿部 康彦	出原 敬宏	梅本 宏樹	小川洋一郎	河野 浩之	幸村 健介	貞森 昭宏
天野 弘	井戸 清智	瓜生 虔二	尾坂 一	河野 辺雅徳	越島 陽子	佐藤 暁子
新井 健悟	井上 愛子	上井 和彦	小田 裕二	川村 健弥	小嶋 英嗣	佐藤 明彦
新井 巧	井上 伸吾	遠藤 武雄	越智 照久	神田 尚俊	小嶋 忠	佐藤 敦
新井 昇	井上 貴博	遠藤 光	小日向敬二	神原 利和	小島 英昌	佐藤 健二
荒木 俊雄	井上 洋一	大川 儀郎	甲斐 一生	木倉宏和・裕子	小島 正彦	佐藤 重邦
有田 浩之	今市 忠志	大河原徳之	垣内 元紀	岸本 道明	小杉 正	佐藤 潤
有田 泰久	今枝 隆徳	大久保 剛	笠井 哲	北村 一郎	小谷 修	佐藤 大輔
安部 真平	入交 義孝	大阪 修一	梶 光一	鬼頭 義明	児玉 満男	佐藤 信義
安部 喜也	岩井 雪乃	大坂 純一	悴田 裕道	木村 太郎	後藤 文次	佐藤 則子
井川 健二	岩崎 孝一	太田 秀範	勝村雄二郎	木村 実	小西 宏明	佐藤 容子
池田 典昭	岩田 聡	太田 道明	加藤 清	日鼻 宏一	小林 孝治	佐藤 亮介
池田 裕治	岩本 秀雄	大谷 尚正	加藤 波里	久場 駿次	小林 英彦	佐野 正己
池田 隆一	植草 明彦	大津 玉子	門脇 要	窪川 満	小林麻由子	芹沢 佐恵

澤井 淳	滝澤 恒明	長澤 裕	樞本真美代	溝部 宏毅	山名 一得
椎葉 幸子	滝沢 将史	中島 千聖	福士 淳治	宮内 祐太	山本 明
宍倉 勲	宅間 淳	仲西 透	福地 健	宮川 貴行	山本 晴
篠原斉二郎	武田 浩行	長沼 伸	福岡 公明	三宅 信行	結城 好一
柴山和華子	武富 功	中原 千隆	藤井 勉	三宅 博	由良 陽子
澁木 洋一	竹村 恵一	永渕 明彦	藤井 元泰	宮下 秀憲	横澤 誠
島崎 由紀	竹谷 曜	中村 圭一	藤田 幸雄	宮嶋 敦	横林 和徳
嶋田 淳	多田 全宏	中村 精吾	伏見 千尋	宮嶋 純雄	横堀 誠
清水 銀次	只友 英資	中村 壮吾	藤本 修身	宮林 寛	吉田 朗
清水 徹三	立川 真悟	中村 真人	藤森 英明	宮原(山本)典弘	吉田 和恵
清水 康資	立場 秀樹	奈須 尚武	二見 道雄	武藤 篤生	吉田 聡
下道 晶久	田中あかね	名須川 厚	古田 梨奈	武藤 博	米倉 正直
下山 朋彦	田中 明良	南波 利昭	星川 仁一	宗像 章	利谷枝里子
少路 宜成	田中 弘幸	西川 勝	星野 浩一	村上 秀人	呂 飛
城代 優二	玉川 二郎	西澤 敦彦	堀井 則孝	村田 光明	若林 篤
白川 栄治	丹下 昇	西田 浩之	堀内 典明	村松梅太郎	和田 光章
榛葉 光夫	千田 容嗣	西丸 健	堀之内将耶	茂木 佳奈	渡辺 和彦
菅原 靖	千年 篤	西村鼓太郎	本多 正二	甕 秀磨	渡辺 康介
菅宮 幸夫	千葉 一裕	西村 寿	本間 聡	望月 修	(一社)東京農工大学同窓会
菅原 隆行	長 榮一	沼澤 勝	馬 小晶	望月 和興	
杉井太市郎	塚田 浩徳	野澤 哲男	前川 安	本野 一郎	
杉谷 寛邦	辻 平吾	野田 敬介	前田 明利	本村 洋美	
杉山 廣樹	土屋(福田)真	野中 明子	前田あゆみ	本山 章教	
須合 雄孝	津野 昌紀	野中 亮	卷田 和丈	糶山 真	
鈴木 昭彦	角田 弘之	野村 将	楨野 利光	森 尚	
鈴木 貴之	椿山 佳明	羽賀 徳久	増田 弘	森井 源藏	
鈴木 伸栄	釣屋 政弘	挾間 浩久	増田 光輝	森下 忠志	
鈴木 英俊	鶴岡 宏樹	橋本 一史	町田 幸男	森嶋 明	
鈴木 雅人	鶴上誠一郎	橋本 康秀	町野 裕貴	森部 直民	
鈴木勇次郎	寺内 健一	橋本 裕	松浦 孝易	森谷 吉久	
鈴木由貴子	TO BUU LUONG	長谷川 正	松尾 礼子	八重樫弘信	
鈴木 義雄	徳重 雅史	長谷川信幸	松崎 新也	安尾 國重	
須田 廣勝	所 明彦	服部 次男	松島 亜樹	矢藤健太郎	
諏訪 学	利光 康	馬場 一秋	松島 詩織	柳澤 秀夫	
清野 正幸	戸塚 育甫	馬場 信行	松田 憲明	屋部 雅夫	
関根 幸子	利根川将充	濱之上 徹	松本 訓正	山内 一慶	
大亀 哲郎	富田 改	林 英一	松本 祥和	山口 弘実	
高木 誠一	伴野 忠	林 寿男	眞鍋 長久	山口 由木	
高野 正志	永井 昌史	林田 守正	丸茂 喜高	山口 善正	
高橋 梓	中岡 博司	茨島 明	三浦 隆一	山崎 政行	
高橋 琢磨	中川 信次	春原 則子	三ヶ島正悟	山崎美代造	
高橋 利行	中阪 直美	日浦 克彦	水谷 晃	山下 千恵	
高橋 真秀	長崎 静夫	東 伸昭	水庭 博	山下 遥	
高松 勝憲	中澤 健雄	久富 東弥	水摩 元明	山田 俊雄	

※ご芳名の公開に承諾を得ている方を掲載しています。

株式会社 八木製作所

創 業：1963年(昭和38年)

所在地：(本 社) (JR中央線豊田駅徒歩1分)

東京都日野市豊田4-36-16

(八王子工場) (JR中央線八王子駅バス7分徒歩3分)

東京都八王子市大和田町3-4-17

(八王子第二工場) (JR中央線八王子駅バス7分徒歩5分)

東京都八王子市大和田町1-21-12

業務内容：事務機器、光学機器、医療機器等の部品の精密加工及び
治具の設計・製作・組立

H P : <http://www.yagiseisakujo.co.jp>

MAIL : support@yagiseisakujo.co.jp

困った時も八木製作所!

PARTY PLAN

忘年会・新年会・歓送迎会・同窓会・謝恩会など

各種パーティーのご用命はサンテリアへ

感染症対策をし、お客様にふさわしい雰囲気でお酒を
おいしい料理と楽しいお酒を
ご希望に合わせたスタイルでご調整いたします
お弁当・TAKE OUT BOXも承っております

〒180-0027 府中市本町 1-1-7

TEL 042-368-6368

MAIL info@santgria.jp

HP santgria.jp



太陽と水と空気と土からの
イノベーションを目指す農工大発ベンチャー

企業ビジネス創生と地域創生に役立つ

株式会社 **アルマイト触媒研究所**

埼玉県所沢市星の宮 1-3-27

代表取締役社長 亀山 秀雄

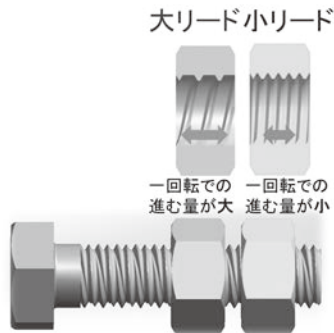
取締役 (技術担当) トラン タン フォン

E-mail : tatkame@cc.tuat.ac.jp

東京農工大学工学府化学システム工学科亀山研究室の35年の研究成果であるアルマイト触媒製造技術、オゾン発生技術、オゾン水製造技術、エタノール改質技術、アンモニア水製造技術、排ガス浄化技術、脱臭技術により、排ガス浄化、再エネ利用、ウイルス感染予防などお客様のニーズに応じて装置開発を行う研究開発型の会社です。

ゆるみ止め二重ねじ締結体 PLBv2

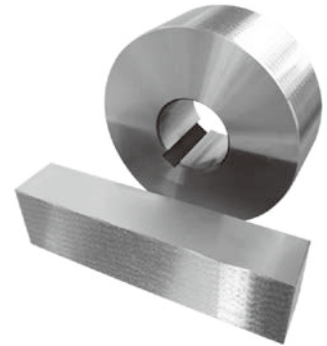
ワンアクションで究極のゆるみ止め効果



製品構造



製品、PLB v2



塑性加工具 転造ダイス

私は機械工学科を1971年に卒業しました。

このたび技術開発した製品「ゆるみ止め二重ねじ締結体 PLB v2」をご紹介します。

この技術開発には15年かかり、その量産化技術も確立しました。

本学工学府からはこの研究に対し博士号が授与されました。

ねじのゆるみでお困りの業界の方は何なりとご相談ください。

ただ今、ゆるみ止め二重ねじ締結体PLB v2の製造元を募集しています！

ボルトは強い振動が続くと緩み、重大事故を引き起こすことがあります。

PLB v2は緩み試験の国際規格、ISO16130で最高評価を得ています。

また、締結は外側ナットを締めると内側ナットも従動するため、

ワンアクションで完了します。現在、国内外に情報発信しています。

■ 博士論文は

https://tuat.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=1480&item_no=1&attribute_id=16&file_no=1



■ 製品カタログは

<https://www.nisseiweb.co.jp/products.php?page=plbv2>



PLBv2



〒409-0502 山梨県大月市富浜町鳥沢 2022

電話 0554-26-5100

新仏 利仲 (しんぶつとしなか)

<https://www.nisseiweb.co.jp/>

Mail t_shinbutsu@nisseiweb.co.jp

Shape your dream
NISSEI

事務局だより

1. 会費納入のお願い

同窓会はみなさまからの会費で支えられています。本会の維持・活動のために会費納入にご協力をお願いいたします。

会費は次の通りです。

1. 終身会費 30,000円

2. 年会費 1,500円

(年会費は年度4月～3月を1年としています。)

同封の払込票にて、上記いずれかの金額を納入してください。会費を納めていただくと「正会員」になります。

◇農工通信に払込票が同封されていない方は納入済です。

◇過去に遡って納入の必要はありません。

※11月中旬時点のデータに基づいておりますため、行き違いで既にご入金いただいておりますらご容赦ください。

2. 農工通信102号への寄稿をお待ちしています!

「農工通信」後期号(1月発行)の制作は同窓生によるものです。大学時代の思い出、農工大学への激励、社会人としての経験、趣味、同窓生交流の呼びかけなど寄稿しませんか?また「農工通信」は現役学生にとって社会人との交流の場、手段にもなります。同窓会では、現役学生への支援にも力を入れています。学生に向けての寄稿も大歓迎です。

・文字数:1200字程度(写真1枚)

・メ切:令和3年6月末日

・送付先:「農工通信」編集委員会

email:nokotusn@tuat-dousokai.jp.org

郵送:同窓会事務局

※クラス会の報告は同窓会ホームページ「クラス会便り」に掲載後101号(前期号8月発行)に掲載になります。

3. 住所等の変更・メールアドレスの新規登録について

農工通信は、ご登録いただいているご自宅住所にお送りしております。転居等で住所等、登録内容の変更があった場合は、同窓会事務局までご連絡願います。

また、メールアドレスを登録いただきますと、各種連絡がスムーズに行えますので登録をお願いいたします。

登録内容の更新・変更は、同窓会ホームページ「入会・会員情報」の「会員情報の変更」からもお手続きができます。



同窓会寄附者ご芳名

(令和元年9月～令和2年9月末現在) (敬称略)

太田 昭夫(農工S41)

林学S45同期会一同

川崎 智子(植防S62)

製糸S32クラス会一同

野上 寛五郎(林学S39)

故 兵野 勝(機械S44)ご家族

東京農工大学同窓会への寄附について

同窓会理事長 千年 篤

今後、東京農工大学同窓会へ寄附頂いた方・団体を農工通信でお知らせいたします。ご寄附に対して感謝いたすとともに、皆様のお気持ちにこたえられるように同窓会を運営していきたいと思っております。

お詫びと訂正

「農工通信」99号(令和2年8月発行)の慶弔欄におきまして、訃報情報に誤りがあり浜口清照様(農工S41)のお名前を掲載してしまいました。浜口様ならびに関係のみなさまには多大なるご迷惑をおかけしたと、深くお詫び申し上げます。

編集後記

Editor's note

「農工通信」(100号)の編集に当たって

2021年1月発行の「農工通信」は1964年から数え100号になりました。節目の記念として千葉学長、栗原同窓会長、千年理事長、亀山広報・情報部長等よりご多用の中、記念のお言葉を頂戴しました。そして、私共、編集委員はこの100号を機に「農工通信」という同窓会誌を皆さんで

考えて戴きたく、紙面の制約もあり十分ではありませんが、農工通信年表を編纂しました。また農工大、同窓会の歴史に思いをいたすべく、編集者の思いや表紙の掲載等に工夫しました。今後とも皆様と共に「農工通信」を軸に同窓生間の交流、そして同窓生と大学との絆が強くなることを期待します。

農工通信(後期号)編集委員 深水 智明(織工 S38)

編集委員会:深水智明(織工 S38)、大亀哲郎(農工 S46)、(後期号)橋本 裕(林産 S47)、金子由実(織高院 S53)

農工通信 第100号(後期号)

発行日 令和3年(2021年)1月1日

発行所 一般社団法人 東京農工大学同窓会

連絡先 〒183-8538 東京都府中市晴見町3-8-1 (一社)東京農工大学同窓会事務局

TEL 042 (364) 3328 FAX 042 (335) 3500

e-mail info@tuat-dousokai.jp.org URL https://tuat-dousokai.org/

振替口座 00120-8-265877番 加入者名 一般社団法人 東京農工大学同窓会

印刷所 小野高速印刷株式会社

〒870-0913 大分県大分市松原町2-1-6

本学では、農学部附属広域都市圏フィールドサイエンス教育研究センター（FSセンター）で栽培した原料（米・芋・麦）をもとに製造した農工大ブランドの本格焼酎「賞典禄（しょうてんろく）」を販売しています。



お中元、お歳暮、贈り物に最適
部会、支部会、同窓会でも
ぜひ賞味下さい。

酒類販売管理者標識	
販売場の名称及び所在地	東京農工大学農学部フィールドサイエンスセンター 東京都府中市幸町3-5-8
酒類販売管理者の氏名	本 林 隆
酒類販売管理研修受講年月日	令和2年9月29日
次回研修の受講期限	令和5年9月28日
研修実施団体名	一般社団法人 日本ボランティアチェーン協会



米焼酎

芋焼酎

麦焼酎

長期貯蔵酒 (米)

賞典禄 FAX 注文票 以下のとおり注文します。

東京農工大学 FS センター 宛 FAX : 042-367-5801

【ご注文内容】		年	月	日
長期貯蔵酒 米焼酎 (1,800 円) 41 度 720ml	本	米焼酎 (1,500 円) 25 度 720ml	本	
焼酎 米・芋・麦3種セット (4,200 円) 25 度 720ml×3	セット	芋焼酎 (1,500 円) 25 度 720ml	本	
		麦焼酎 (1,500 円) 25 度 720ml	本	
合計注文金額			円	

【ご注文者様情報】				
お名前			フリガナ	
住所	〒			
電話番号			FAX 番号	
生年月日	T.S.H	年	月	日

※年齢確認をさせていただく場合がございますのでご了承願います。

- 【ご注意】
- ※1 お支払いは代金引換またはクレジットカードになります。詳しくは下記 URL をご覧下さい。ただし、FAX でご注文された場合のお支払いは、代金引換のみとなりますので、ご注文者様以外への配送は致しかねます。
 - ※2 ご注文いただいた上記金額の他に、送料 (5,000 円以上は無料) 及び代金引換手数料 (代金引換額に応じた所定の金額) が必要になりますので、予めご了承願います。
 - ※3 本注文票により収集された個人情報、賞典禄の販売以外の目的には使用いたしません。

ネットショップ : FS センター農工夢市場ネットショップ

<http://www2.enekoshop.jp/shop/noukoudai/>

問い合わせ先

農学部附属広域都市圏フィールドサイエンス教育研究センター事務室

TEL042-367-5811